石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要29

●

― 大谷地区・内藤家地点 ―

2022年3月

島根県大田市教育委員会

石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要29

●

― 大谷地区・内藤家地点 ―

２０２２年３月

島根県大田市教育委員会

大谷地区　４区全景（北東より）

同　４区全景（北西より）

序

島根県のほぼ中央部に位置する大田市が誇る石見銀山遺跡は、特に 16 世紀から 17 世紀にかけて大量の銀を産出し、当時の世界経済や文化交流をけん引した、日本を代表する鉱山遺跡です。採掘から製錬までが行われた鉱山跡と鉱山町、鉱山から港までを結ぶ２本の街道と周辺の山城跡、銀鉱石・銀が積み出され諸物資が搬入された港湾などによって形成された文化的景観が、現在も当地に引き継がれています。

平成19年の第31回世界遺産委員会において、その顕著で普遍的な価値が認められ、「石見銀山遺跡とその文化的景観」として世界遺産一覧表への記載が決議されました。

先人から引き継がれてきた石見銀山遺跡を着実に後世に引き継ぐため、世界遺産登録後も保存・活用の推進と価値の顕在化を目的として、大田市教育委員会は島根県教育委員会と合同で、発掘調査・文献調査・石造物調査などの総合的な調査を継続しています。

本書は、令和３年度に実施した大谷地区における発掘調査の概要報告です。大谷は「銀山六谷」の一つにも数えられる主要な谷で、間歩をはじめ岩盤を加工した階段や平坦面、寺社跡などが残っています。調査によって、現地に残る遺構が顕在化され、鉱山都市の様子や移り変わりが明らかとなってきました。

得られた調査成果は、将来に向けての保存・活用の資料とするとともに、これまでの成果の蓄積と併せて公開・活用をはかることで、石見銀山への関心や愛着がより高まるよう、取り組んでいきたいと考えています。

おわりに、調査に際してご快諾いただきました土地の所有者様、お力添えをいただきました文化庁・島根県教育委員会など関係機関の皆様に、心より厚く御礼申し上げます。

令和４年３月

島根県大田市教育委員会

教育長　　**武田　祐子**

例　言

1．本書は、島根県大田市大森町に所在する史跡石見銀山遺跡の発掘調査概要である。

2．調査は国庫補助事業として大田市教育委員会が事業主体となって実施した。

3．本書は、令和３年度に大谷地区、及び温泉津地区で実施した調査の概要をまとめたものである。

4．調査体制は下記のとおりである。

〔石見銀山遺跡調査整備活用委員会〕

太田洋子（地元有識者）　大矢敬子（行政経験者）

川口　純（DOWA ホールディングス㈱執行役員）　黒田乃生（筑波大学大学院教授）

苅谷勇雅（大田市伝統的建造物群保存地区保存審議会委員）

佐々木愛（島根大学法文学部教授）　田邉征夫（（公財）元興寺文化財研究所所長）

津村眞輝子（古代オリエント博物館研究部長）　内藤ユミイザベル（日本イコモス国内委員会理事）

仲野義文（特定非営利法人石見銀山資料館理事長）　中村哲郎（中村ブレイス㈱専務）

松村恵司（元奈良文化財研究所所長）

〔事 務 局〕 大田市教育委員会教育部石見銀山課

〔調 査 員〕 山手貴生・新川　隆・尾村　勝 （大田市教育委員会教育部石見銀山課）

〔遺物整理〕 髙村玲子・井上伸子・淺野美貴

〔調査指導〕 文化庁記念物課、独立行政法人奈良文化財研究所、島根県教育委員会

5．挿図の縮尺は、図中に示した。

6．挿図中の座標は、世界測地系を使用した。また、レベル高は標高を示す。

7．Fig. 1 は国土交通省国土地理院発行の地形図を縮小編集し、一部加筆して使用した。

8．本文中に使用した略号は下記のとおりである。

ＳＢ－建物　ＳＤ－溝跡　ＳＫ－土坑　ＳＷ－石垣、石列　ＳＸ－特殊遺構、不明遺構　Ｓ－礎石

9．挿図中のマンセル表記及び土色は農林水産省技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』によった。

10. トレンチの記載については、挿図中や表中・キャプションでは、〇Ｔと略して表記している。

11. 発掘調査にあたっては、大橋泰夫氏より、ご指導・ご教授を賜った。

12. 本書の執筆は、第３章については新川が、それ以外を山手が行った。本文中の挿図は、遺構図については尾村が、遺物実測図については新川が中心になって作成した。写真については、遺構写真は各担当者が、遺物写真については山手が撮影した。編集は筆者協議の上、新川が行った。

13. 出土資料及び実測図・写真などは大田市教育委員会で保管している。

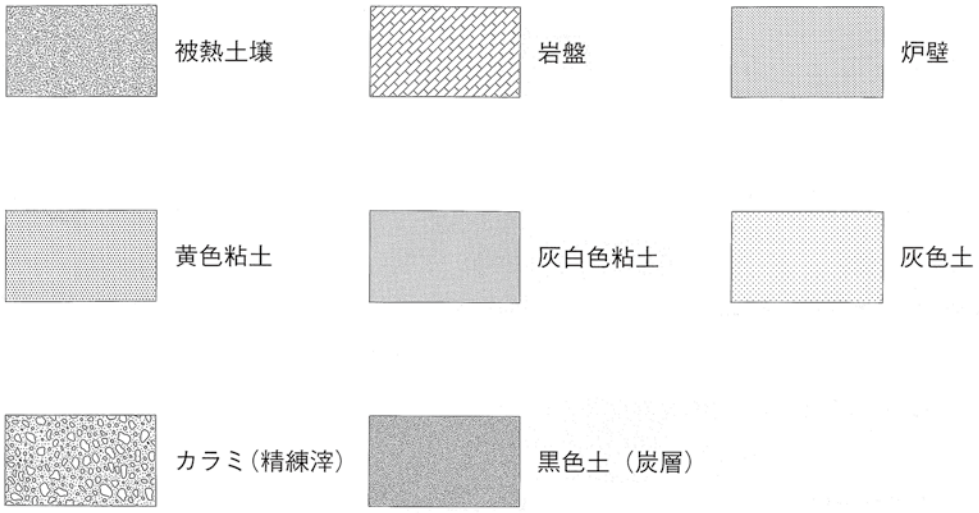
凡　例

１．図版の表現

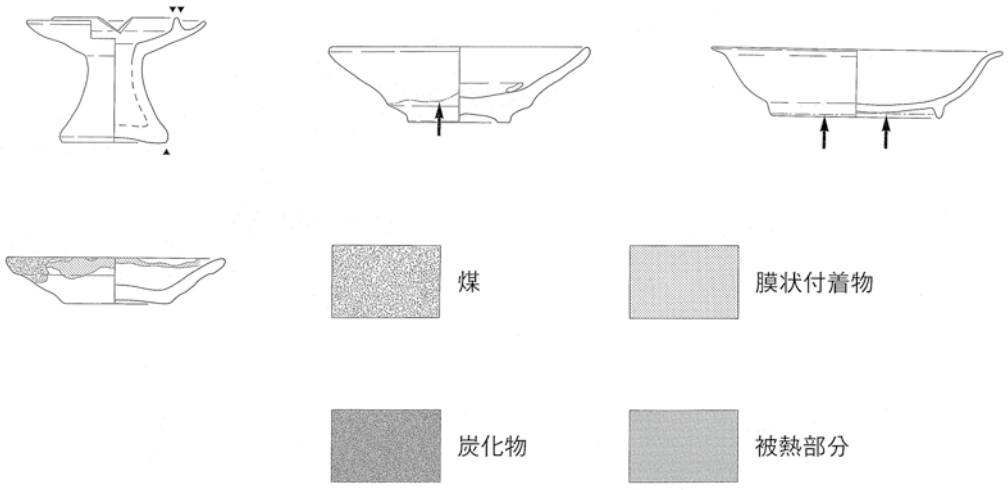
遺構・遺物図版中における表記は下記による。

これ以外のものについては個別に図中に示した。

〔遺 構〕



〔遺 物〕



図中の▼印あるいは一点鎖線（図中↑箇所）は施釉範囲の境界を示す。

２．本文中の語句

以下の語句については、カタカナ表記に統一し、その意味を定義しておく。

ズ　　リ・・・選鉱過程にて除去される化学的変化に起因しない目的外鉱物

ユリカス・・・比重選鉱により除去された砂粒

カ ラ ミ・・・広義の製錬工程にて排出された鉱滓

本文目次

第１章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置と概要…… 1

第２節　令和３（2021）年度の調査…… 2

第２章　大谷地区の調査

第１節　調査地の周辺環境…… 5

第２節　調査にかかる経緯…… 5

第３節　４区の調査成果…… 5

第４節　６トレンチの調査成果……11

第５節　出土遺物……13

第３章　温泉津地区　内藤家地点の調査

第１節　調査にかかる経緯……19

第２節　調査の概要……19

第３節　調査成果……19

第４章　総括

第１節　本年度の調査成果……26

第２節　次年度の課題……27

図　　版

挿図目次

Fig. 1　石見銀山遺跡位置図（S = 1 ／ 100,000）…… 1
Fig. 2　石見銀山遺跡調査地区・地点位置図（S = 1 ／ 20,000）…… 4
Fig. 3　大谷地区調査区配置図（S = 1 ／ 500)）…… 6
Fig. 4　大谷地区４区平面図・土層断面図（S = 1 ／ 60）…… 8
Fig. 5　大谷地区４区ＳＤ０１石積立面図（S = 1 ／ 60）…… 9
Fig. 6　大谷地区６Ｔ平面図・土層断面図（S = 1 ／ 60）……12
Fig. 7　大谷地区４区出土遺物実測図Ⅰ（S = 1 ／ 2 ・ 1 ／ 3）……14
Fig. 8　大谷地区４区出土遺物実測図Ⅱ（S = 1 ／ 3 ・ 1 ／ 4）……15
Fig. 9　大谷地区６Ｔ出土遺物実測図（S = 1 ／ 2 ・1 ／ 3）……18
Fig.10　温泉津地区内藤家地点位置図（S = 1 ／ 2,500）……20
Fig.11　温泉津地区内藤家地点調査区配置図（S = 1 ／ 1,000）……21
Fig.12　温泉津地区内藤家地点土蔵平面図（S = 1 ／ 50）……22
Fig.13　温泉津地区内藤家地点土層断面図（S = 1 ／ 50）……23
Fig.14　温泉津地区内藤家地点出土遺物実測図（S = 1 ／ 2 ・ 1 ／ 3 ・ 1 ／ 4 ・ 1 ／ 6）……24

表目次

Tab. 1　石見銀山遺跡調査一覧…… 3
Tab. 2　大谷地区４区出土遺物一覧表……16
Tab. 3　大谷地区６Ｔ出土遺物一覧表……18
Tab. 4　温泉津地区内藤家地点出土遺物一覧表……25

図版目次

巻頭図版　大谷地区　4区全景（北東より）
同　4区全景（北西より）
ＰＬ.01　大谷地区　4区完掘状況（北より）
同　4区完掘状況（北東より）
ＰＬ.02　大谷地区　4区第１面検出状況（北より）
同　4区第１面検出状況（北東より）
ＰＬ.03　大谷地区　4-Ⅱ区第1面検出状況（北より）
同　4-Ⅲ区第1面検出状況（北より）
ＰＬ.04　大谷地区　4-Ⅱ区第1面遺構検出状況（北より）
同　4-Ⅱ区第1面遺構検出状況（西より）
ＰＬ.05　大谷地区　4-Ⅱ区ＳＤ01検出状況（西より）
同　4-Ⅱ区ＳＤ01完掘状況（西より）
同　4-Ⅰ・Ⅱ区黄色土検出状況（北より）
同　4-Ⅱ区ＳＸ７０検出状況（北より）
同　4-Ⅱ区ＳＸ７０検出状況（南より）
同　4-Ⅱ区ＳＸ７０検出状況（西より）
ＰＬ.06　大谷地区　4-Ⅱ区第３面遺構検出状況（北より）
同　4-Ⅱ区第３面遺構検出状況（西より）
ＰＬ.07　大谷地区　4-Ⅰ･Ⅲ区第３面遺構検出状況（北より）
同　4-Ⅰ･Ⅲ区第3面遺構検出状況南東より）
ＰＬ.08　大谷地区　4-Ⅱ区SD01北面石積検出状況南より）
同　4-Ⅰ区ＳＤ０１完掘状況（北より）
ＰＬ.09　大谷地区　4-Ⅲ区ＳＤ０１完掘状況（北より）
同　4-Ⅲ区ＳＤ01石積検出状況（西より）
同　4-Ⅲ区ＳＤ01石積検出状況（東より）
同　4-Ⅲ区ＳＤ01石積検出状況（北より）
同　4-Ⅲ区ＳＤ01石積検出状況（北より）
ＰＬ.10　大谷地区　4-Ⅱ区ＳＸ７０炭層検出状況（北より）
同　4-Ⅱ区ＳＸ７０炭層検出状況（南より）
同　4-Ⅱ区ＳＷ０７･０８検出状況（東より）
同　4-Ⅱ区ＳＷ０７・０８検出状況（南より）
同　4-Ⅱ区ＳＤ１１検出状況（西より）
同　4-Ⅰ区南側検出状況（南より）
同　4-Ⅲ区ＳＷ０９検出状況（南より）
ＰＬ.11　大谷地区　4-Ⅱ区西壁土層断面（東より）
同　4-Ⅱ区西壁北側土層断面（東より）
同　4-Ⅱ区西壁中央土層断面（東より）
同　4-Ⅱ区西壁南側土層断面（東より）
同　調査指導風景（北より）
ＰＬ.12　大谷地区　６Ｔ全景（南東より）
同　６Ｔ全景（北より）
同　６Ｔ南側検出状況（北より）
同　６Ｔ南側検出状況（西より）
同　６Ｔ北側検出状況（南より）
ＰＬ.13　大谷地区　６ＴＳＢ０３検出状況（南より）
同　６ＴＳＢ０３検出状況（南より）
同　６ＴＳＤ１２検出状況（東より）
同　６ＴＳＤ１２検出状況（北より）
同　６ＴＳＫ１０・１１検出状況（西より）
同　６ＴＳＫ１０・１１検出状況（南より）
同　６ＴＳＫ１１土層断面（西より）
同　６ＴＳＤ１３・ＳＫ１２検出状況（南より）
ＰＬ.14　内藤家地点　調査前状況（北西より）
同　完掘状況（北西より）
ＰＬ.15　内藤家地点　２Ｔ完掘状況（南より）
同　１Ｔ・２Ｔ調査前状況（南より）
同　１Ｔ完掘状況（北より）
ＰＬ.16　内藤家地点　ＳＸ０１調査前状況（北より）
同　ＳＸ０１北側掘下げ状況（北より）
同　ＳＸ０１北側完掘状況（北より）
ＰＬ.17　内藤家地点　２Ｔ炭化物層検出状況（西より）
同　２ＴＳＷ０１検出状況（南より）
同　２ＴＳＷ０１検出状況（西より）
同　２ＴＳＷ０１石材検出状況（西より）
同　２Ｔ炭化物層土層断面（東より）
ＰＬ.18　内藤家地点　３ＴＳＷ０２検出状況（西より）
同　３ＴＳＷ０２検出状況（北より）
同　１ＴＳＰ０１完掘状況（西より）
同　１ＴＳＰ０１完掘状況（北より）
同　１ＴＳＰ０２完掘状況（東より）
同　１ＴＳＰ０２完掘状況（北より）
同　ＳＸ０１内垂壺完掘状況（北より）
同　ＳＸ０１内水溜完掘状況（北より）
ＰＬ.19　大谷地区第４地点出土遺物
ＰＬ.20　大谷地区６Ｔ出土遺物
大谷地区･内藤家地点出土金属製品
ＰＬ.21　内藤家地点出土遺物
ＰＬ.22　大谷地区･内藤家地点出土遺物

第１章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置と概要

第１項　石見銀山遺跡の位置と概要（Fig. １）

石見銀山遺跡は、島根県中央部に位置する大田市にある鉱山遺跡である。遺跡の中心部は日本海から直線距離で約６㎞の内陸部に位置する。遺跡の周辺には大江高山火山群の一角である仙ノ山や、要害山などの海抜 400 ～ 500 ｍの山々が連なり、山間は深い谷をなし、水系が発達している。山地から海岸に至るまでに平地は極めて少なく、銀を運んだ街道は中小の丘陵や台地、谷間の水系の間を縫って設けられている。港と港町が位置する沿岸部にはリアス式海岸が広がり、港の奥部は狭い谷となっている。

本遺跡は 16 世紀から 20 世紀にかけて鉱業活動が行われた鉱山跡と鉱山町を中心に、周囲の山城跡や銀鉱山から港までを結ぶ２本の街道、銀鉱石・銀の積出しや銀山で必要な諸物資を搬入した港湾などからなる複合遺跡である。銀の生産から搬出

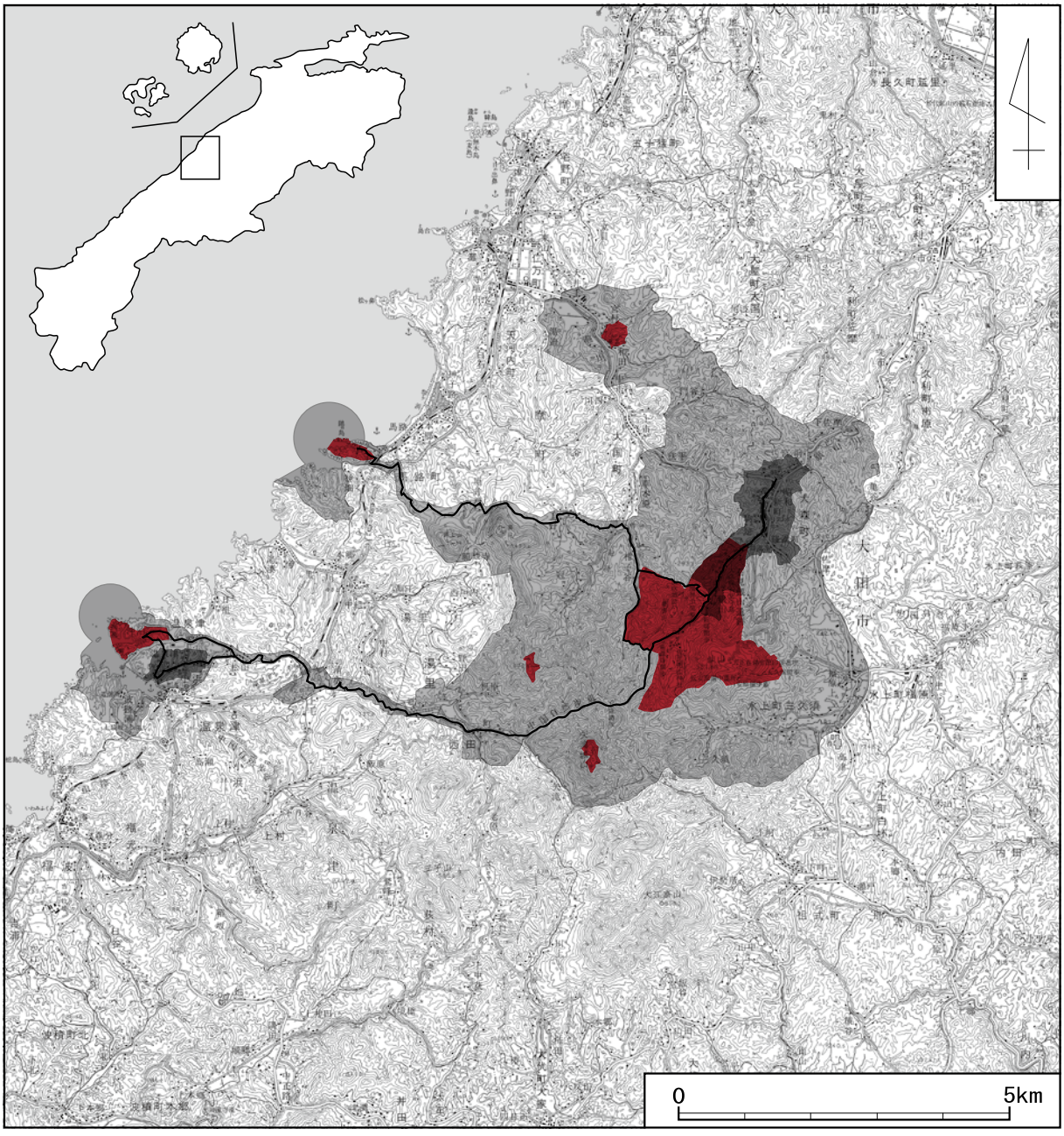


Fig. １　石見銀山遺跡位置図（Ｓ＝１／100,000）

に至る鉱山開発の社会機構及び社会基盤施設の総体を示すこれらの良好な遺跡群は、鉱山町や港湾などの建造物群とともに、当時の土地利用の在り方と機能の一部が現在にも伝達されつつ、自然と共生した顕著な普遍的価値を持つ文化的景観の事例として、平成19（2007）年にユネスコ世界遺産に登録された。

第２項　調査の経過（Tab. １）

石見銀山遺跡の発掘調査は、大田市教育委員会（以下、市教委）が昭和58（1983）年度から開始した。昭和60（1985）年度には島根県教育委員会（以下、県教委）によって『石見銀山遺跡関連遺跡分布調査報告書』が刊行されて、石見銀山遺跡とその周辺の銀山関連遺跡の分布が明らかとなった。昭和61（1986）年度には県教委によって『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』が刊行され、拠点箇所での発掘調査を継続することが、石見銀山の歴史と遺跡を明らかとしていく上で重要であるという指針が示された。その指針に基づいて、昭和63（1988）年からは県教委と市教委が共同で、平成18（2006）年からは市教委が主体となって毎年継続して発掘調査を実施している。

平成８（1996）年度からは石見銀山遺跡総合調査が始まり、平成14（2002）年度にはその成果として、石見銀山遺跡の広域的な保存を目的とした史跡範囲の追加指定が行なわれた。その後、調査の進展と共にさらに史跡範囲の拡大と保護措置が図られ、平成20（2008）年には、史跡指定総面積が389haとなった。

石見銀山遺跡では、平成８（1996）年度に組織された発掘調査委員会で、「採鉱と製錬の技術体系の解明を調査の柱とし、400年に及ぶ鉱山都市の実態を明らかとする」ことを目的として発掘調査が立案され、同委員会の指導の下で実施してきた。発掘調査委員会は、調査・整備の進展に伴って、平成14（2002）年に「石見銀山遺跡調査整備委員会」、平成20（2008）年に「石見銀山遺跡調査活用委員会」と改組された。平成26（2014）年には石見銀山の調査・整備・活用の全般を統括する「石見銀山遺跡調査整備活用委員会」と、考古学・文献史学・自然科学などの専門家を主体とする調査の専門部会「石見銀山遺跡調査専門委員会」となり、それぞれの指導の下で調査を実施した。さらに、令和２（2020）年度からは、指導組織が「石見銀山遺跡調査整備活用委員会」に一本化され、専門分野ごとに指導を受けながら調査を進めることとしている。これまでの調査地点と調査の経過はTab. １のとおりである。

第２節　令和３（2021）年度の調査

第１項　調査の概要

令和３（2021）年度は、昨年度に引き続いて大谷地区の発掘調査を実施した。本地区の調査は、中長期計画においては石見銀山の谷部における調査として位置付けており、調査期間を令和２（2020）年度～令和４（2022）年度の３か年としている。令和元（2019）年11月12日に開催された第６回石見銀山遺跡調査整備活用委員会にて、大谷地区の発掘調査が承認され、令和２（2020）年度より実施している。

本年度は昨年度の調査成果と、現地における分布調査・環境整備の成果を元に、島根大学の大橋泰夫教授より指導を受けて調査を計画し、令和３年７月16日付けで史跡の現状変更が承認され、調査に着手した。

第２項　指導関係及び公開事業

今年度の発掘調査方針と、調査箇所・範囲について５月31日に、成果の検証と令和４（2022）年度以降の発掘調査計画について12月10日に、いずれも大橋泰夫氏（島根大学教授）から指導をいただいた。

公開事業としては、令和３（2021）年９月12日に、「石見銀山研究会」の現地見学・検討会において、研究会会員と検討会参加者を対象に、調査状況を公開した。

Tab. 1　石見銀山遺跡調査一覧

年　度	西　暦	調　査	調　査　地　点	備　考
昭和 58 年	1983	発掘調査	①代官所跡、④蔵泉寺口番所跡	石見銀山遺跡総合整備計画の策定
60 年	1985	分布調査	大田市、温泉津町、仁摩町、邑智町、赤来町、大和村、羽須美村に所在する石見銀山関連遺跡	
63 年	1988	発掘調査	⑨龍源寺間歩	
平成元年	1989	発掘調査	蔵泉寺口番所跡、②向陣屋跡、⑧上市場	
2 年	1990	発掘調査	蔵泉寺口番所跡、⑥大龍寺谷、③旧河島家	
3 年	1991	発掘調査	⑤下河原吹屋跡	
4 年	1992	発掘調査	⑦山吹城跡下屋敷	
5 年	1993	発掘調査	⑫石銀千畳敷	
6 年	1994	発掘調査	石銀千畳敷	
7 年	1995	発掘調査	石銀千畳敷	
8 年	1996	発掘調査	⑬石銀藤田	総合調査開始
9 年	1997	発掘調査	⑰宮ノ前、⑪出土谷、石銀藤田	
10 年	1998	発掘調査	⑩栃畑谷、石銀藤田、⑭於紅ヶ谷、⑮竹田	
11 年	1999	発掘調査	宮ノ前、石銀藤田、出土谷、竹田	
12 年	2000	発掘調査	宮ノ前、石銀藤田、出土谷、竹田	
		分布調査	柑子谷	
13 年	2001	発掘調査	宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、⑯本谷、町並み保存地区（阿部家、熊谷家）	
14 年	2002	発掘調査	宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、本谷、町並み保存地区（阿部家、熊谷家）	
15 年	2003	発掘調査	宮ノ前、下河原下組、出土谷、本谷	
16 年	2004	発掘調査	宮ノ前、本谷、港湾集落、町並み保存地区	
17 年	2005	発掘調査	本谷、町並み保存地区（岡家）	
18 年	2006	発掘調査	本谷、町並み保存地区（宗岡家）	
19 年	2007	発掘調査	⑱安原谷、下河原、町並み保存地区（渡辺家）	世界遺産登録
20 年	2008	発掘調査	安原谷、町並み保存地区（柳原家、渡辺家）、⑲清水谷製錬所跡	
21 年	2009	発掘調査	安原谷、本谷、町並み保存地区（杉谷家、渡辺家）、清水谷製錬所跡	
22 年	2010	発掘調査	安原谷、本谷、⑳昆布山谷、港湾集落	
23 年	2011	発掘調査	昆布山谷、石銀、町並み保存地区（旧大住家）、港湾集落	
24 年	2012	発掘調査	昆布山谷、港湾集落	
25 年	2013	発掘調査	昆布山谷	
26 年	2014	発掘調査	昆布山谷、町並み保存地区（宗岡家）	
27 年	2015	発掘調査	昆布山谷、町並み保存地区（宗岡家）、㉑豊栄神社	
28 年	2016	発掘調査	昆布山谷、町並み保存地区（宗岡家、金森家）	
29 年	2017	発掘調査	昆布山谷、町並み保存地区（金森家）、豊栄神社	
30 年	2018	発掘調査	㉒仙ノ山、町並み保存地区（金森家）、佐毘売山神社	
令和元年	2019	発掘調査	仙ノ山、町並み保存地区（金森家）	
2 年	2020	発掘調査	㉓大谷	
3 年	2021	発掘調査	㉓大谷、港湾集落（内藤家）	

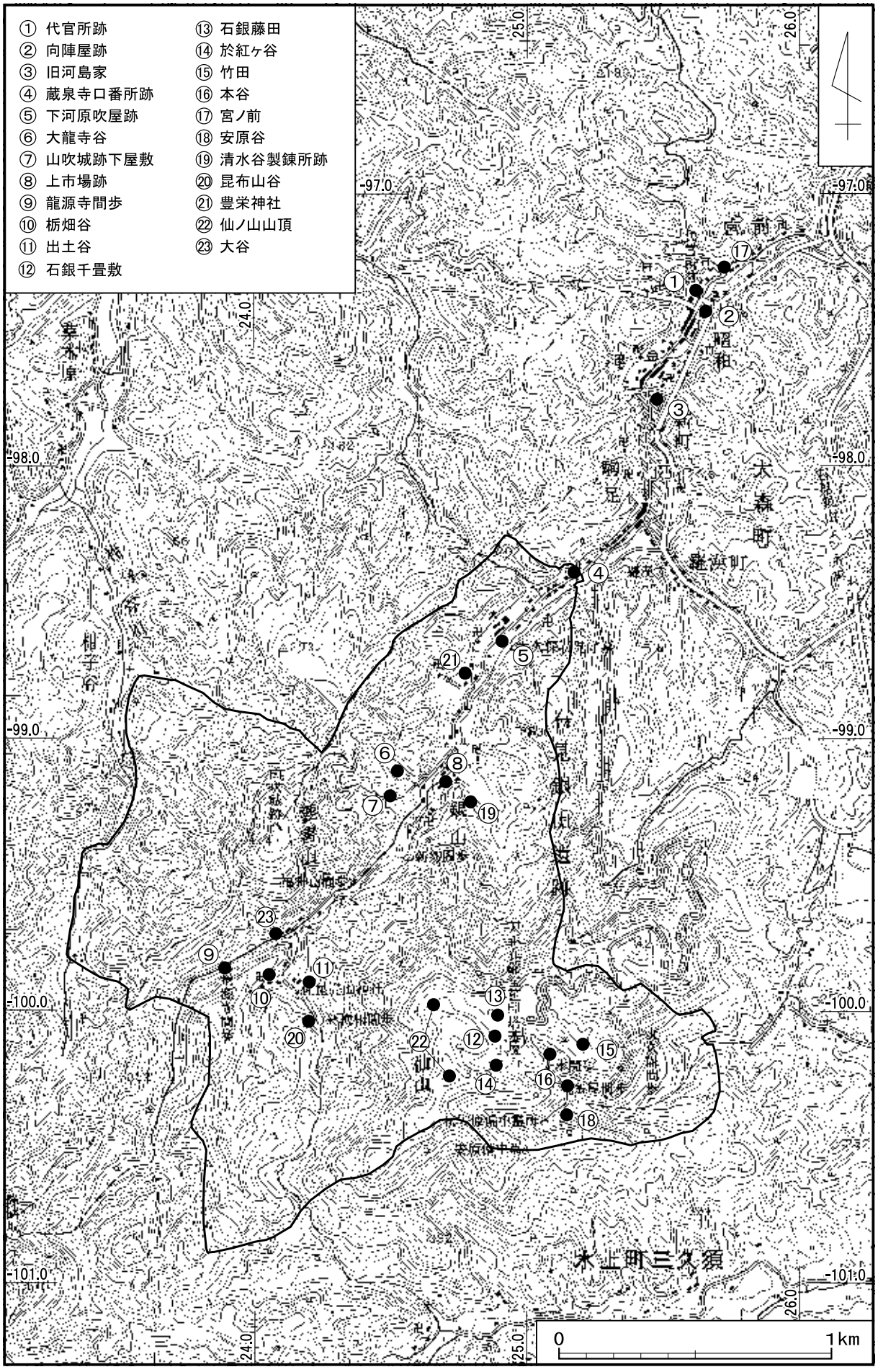


Fig. 2　石見銀山遺跡調査地区・地点位置図（S＝1／20,000)

第２章　大谷地区の調査

第１節　調査地の周辺環境

大谷は、大森町と銀山町の境である蔵泉寺口から、銀山柵内の西端部に位置する坂根口まで通じる主要道の西部で、蔵泉寺口から下河原、休谷、御崎谷と抜けた先に位置し、石見銀山の中でも主要な谷である銀山六谷（大谷、本谷石銀、栃畑谷、昆布山谷、休谷、下河原）の一つにも数えられている。大谷の位置する蔵泉寺口から坂根口までの道は、現在では石見銀山公園から公開坑道の一つである「龍源寺間歩」へと向かう主要な見学道となっており、石見銀山の中で最も見学者の多い地域である。

大谷の東部には国の史跡にも指定されている高橋家住宅があり、高橋家住宅の南からは栃畑谷・昆布山谷へと続く道が延びている。

寛政元（1789）年頃に描かれた「石見銀山龕絵図」の大谷にあたる範囲には、「御銀吹所」と記された建物があり、江戸時代後半には大谷周辺で銀生産が行われていたことが窺われる。この絵図には、銀山区域の主要な施設が描かれており、大谷の範囲には御銀吹所のほかに神宮寺や西善寺などの寺院もみられる。

また、大谷の東部で御崎谷・栃畑谷と接する銀山川対岸には、明治時代に藤田組が所有した製錬所が所在していた記録が残っている。同所は、「石見銀山龕絵図」にも「御銀吹所」と記された建物が描かれており、江戸期の吹屋を踏襲した施設だったのではないかと推測している。

第２節　調査にかかる経緯

第１節でも述べたように、大谷は近世には銀山の中でも主要な谷の一つとして、採掘・製錬が行われていた場所である。また、現在では主要な観光道の一つとして機能しており、将来的に調査成果を整備・活用へとつなげていくことを考えた場合には、非常に適している。

令和２（2020）年度には、大谷の銀山川北岸を第１地点として調査を実施した。現地調査では、草刈りや岩盤清掃などの環境整備を行ったのちに、岩盤下部の平坦地に１～３区を設定し、合わせて岩盤に直交するトレンチも４箇所配置して発掘調査を実施した。調査によって、①大谷地区においては戦国時代もしくは江戸時代初期から、近代に至るまで継続的に利用がされていたこと、②第１地点北部に展開する岩盤は、江戸時代を通じて段階的に加工がされていったこと、③第１地点南部の平坦面には、江戸時代後期には建物が立っていたこと、などが明らかとなった。ただし、１トレンチで検出された石積の溝（ＳＤ０１）の性格、位置関係は課題として残り、当地の地割に沿って配されている可能性も想定されるものの、十分に把握できなかった。なお、令和３（2021）年度の調査範囲でもＳＤ０１は検出されたが、流元・流末は確認できておらず、次年度の課題としている。また、４トレンチでは広い範囲で床面の貼り替えが確認され、当地に製錬施設があった可能性が想定されていた。

令和３（2021）年度は、令和２（2020）年度の調査成果を元に、４トレンチを中心としてその東西に調査区を新たに設定し、一帯を４区として発掘調査を実施した。４区の各区画の呼称は、旧４トレンチを４－Ⅰ区、４－Ⅰ区の西側区画を４－Ⅱ区、４－Ⅰ区の東側区画を４－Ⅲ区とした。さらに、銀山川の南側の平坦地には６トレンチを設定して調査を実施した。

第３節　４区の調査成果

第１項　遺構面

本年度の調査により、本地区の遺構面が少なくとも３時期に分けられることが判明した。また、最も新しい遺構面である第１面より上は昭和期に盛土された堆積層であることも確認できた。

第１面はFig. ４の４・５層上面で、出土遺物より幕末から明治頃とみられる。第１面における

Fig. 3　大谷地区調査区配置図（S＝1／500）

遺構としては、ＳＤ０１の上半と、ＳＷ０７、ＳＷ０８が該当する。ＳＤ０１は、昨年度の調査では１トレンチ北部で検出されていた溝で、第２面の段階から形成され、第１面の時期には下部や石積が埋められ、浅い溝として機能していたことが、本年度の調査によって確認できた。

第２面は19層・20層上面で、ＳＢ０１・ＳＤ０１が構築された後、ＳＤ01の一部が埋められて再整地が行われるまでの時期である。

第３面は４区でも一部の遺構（ＳＤ１１）のみが確認された遺構面で、出土遺物より17世紀代までさかのぼる可能性がある。

第２項　検出遺構

【ＳＤ０１】

ＳＤ０１は、４－Ⅰ～Ⅲ区で検出された溝跡で、南面と北面が割石積による石組、底部が白色粘土の２面水路である。昨年度の調査では、１トレンチ北部で一部が検出されていたが、本年度の調査によって４区全域までは伸びることが確認された。検出された範囲での幅は､西部（４－Ⅱ区）では天端で70～80㎝、東部（４－Ⅲ区）では40～60㎝である。１トレンチでは、南面の天端の一部で、ＳＢ０１の礎石とみられる石（Ｓ０４）が確認されていたこともあり、平坦地の建物に伴う排水溝として報告していた。また､ＳＤ０１は、水を銀山川へ向けて排水するために本地区の地割に沿って４－Ⅱ区付近で南側に屈曲する可能性も考慮されていたが、本年度の調査範囲では南側へは屈曲せず、さらに東方向へ延びることが確認された。以下、４区におけるＳＤ０１の調査成果について、西側から４－Ⅱ区、４－Ⅰ区、４－Ⅲ区の順に報告する。

４－Ⅱ区では区画の北部に位置し、南面は石積が区画の西端から東端まで続いているが、北面では西端から約１ｍの位置で岩盤に接している。石積と岩盤とが接する位置から東の部分は、岩盤を垂直方向に加工して溝の北面としている。また、北面の石垣は南面の石垣天端面より約90㎝高く積まれている。そのため、本区画におけるＳＤ０１北面の石積部分は、ＳＤ０１の北面石積であるとともに、本区画の北側平坦面の土留としても機能している。また、北面では岩盤上に石を積んでいる箇所も確認できた。

積石は南北で様相がやや異なっており、北面は幅35～50㎝、高さ20～35㎝と幅広の石と、一辺が10～20㎝程度の石を使用している。南面には、一部に50㎝を超える石があるが、ほとんどは幅30㎝以下、高さ20㎝以下の石を用いている。天端は、南面側では概ね残っていたが、北面側では西部の一部に残るのみでほとんど崩落していた。天端の標高は、北面の西端で203.65ｍ、南面は西端で203.70ｍ、東端で203.58ｍである。底面の標高は、西端が203.76ｍ、東端が203.37ｍで、１トレンチと同じく西から東に向かって水が流れる構造になっている。また、１トレンチのＳＤ０１南面上で確認していたＳ０４と同様、ＳＢ０１の礎石の可能性のある石が、本区画でもＳＤ０１南面上で２点確認された。（Ｓ０５・Ｓ０６）。なお、同様の石は４－Ⅰ区・Ⅲ区でも確認されている（Ｓ０７～Ｓ０９）。

４－Ⅰ区でも４－Ⅱ区と同じく区画の北部に位置し、西端から東端まで続いている。北面側は岩盤の上に20㎝程度の礫を積み上げ、その上に幅約30～50㎝、高さ約20～30㎝のやや横長の石を置いて天端としている（ＳＷ０２）。天端の標高は、西端が204.50ｍ、東端が204.45ｍで、４－Ⅱ区の東端部の天端とほぼ同じである。この部分の石積は他の箇所とは様相が異なり、石材が立てて設置されていることから、他のＳＤ０１の石積に後出すると考えられ、後世に増し積みされたと推定される。溝の底面は､203.48～203.45ｍで、本区画内においてはほぼ平坦になっている。南面側は上部の石材が抜き取られており、基底石のみが残存していた。

４－Ⅲ区では､平面形が｢鍵形｣に屈曲している。まず、４－Ⅲ区北西端から東へ約1.2ｍの位置で南に90°屈曲し、南へ約2.3ｍ伸びる。そこからさらに東へ90°屈曲して約1.5ｍで東端にいたる。東端からさらに東へ続いていくが、調査範囲外の

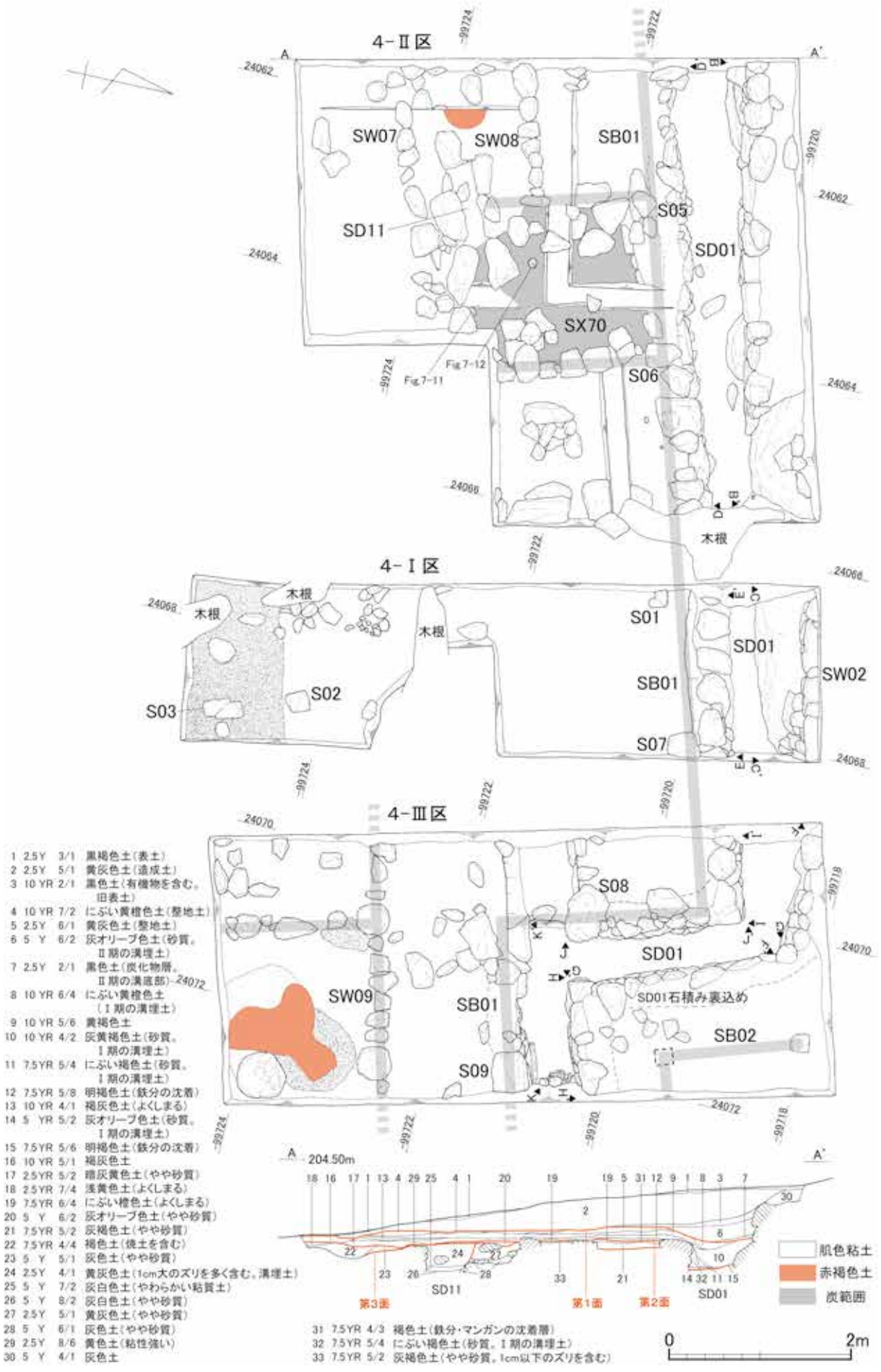


Fig. 4　大谷地区４区平面図・土層断面図（S＝１／60）

ため、続きは確認できなかった。本区画においてはＳＤ０１の平面形が複雑であるため、石積の状況は、Fig. 4に示した見通しを表すアルファベット順に、岩盤側はＦ－Ｆ’～Ｈ－Ｈ’の順、平坦地側はＩ－Ｉ’～Ｋ－Ｋ’の順で報告する。

Ｆ－Ｆ’は、４－Ⅲ区西壁から約1.2ｍで、底部と西半部は岩盤を利用している。天端石は流失しており､現状での標高は203.50ｍである。また、土留めの石列の石が上部に乗っている。積石には20㎝程度の石を使用している。底面の標高は西端部が202.90ｍ､東端部が202.75ｍである。Ｆ－Ｆ’の東端部から90°南に屈曲してＧ－Ｇ’につながる。Ｇ－Ｇ’は長さ約2.25ｍで、南端部以外は天端が良く残っており、標高は北端部が203.50ｍ、南端部が203.48ｍである。積石には、下半部は幅30～50㎝、高さ20～30㎝の石を、上半部は幅25㎝程度の石を使用している。また、天端には積石が露出している箇所もあるが、大部分は粘土で固めている。底面の標高は、北端部が202.80ｍ、南端部が202.70ｍと、わずかに南へ傾斜している。南端部で東に90°屈曲してＨ－Ｈ’へつながる。Ｈ－Ｈ’は西端部から東に1.25ｍまで確認したが、さらに東に続いている。この範囲では天端がほとんどなくなっており、東端の１つのみが残っていた。積石には主に幅40～60㎝程度の石を使用しており、隙間に20㎝程度の石を詰めている。底面の標高は202.64ｍである。

Ｉ－Ｉ’は、４－Ⅲ区西壁から約90㎝の範囲で

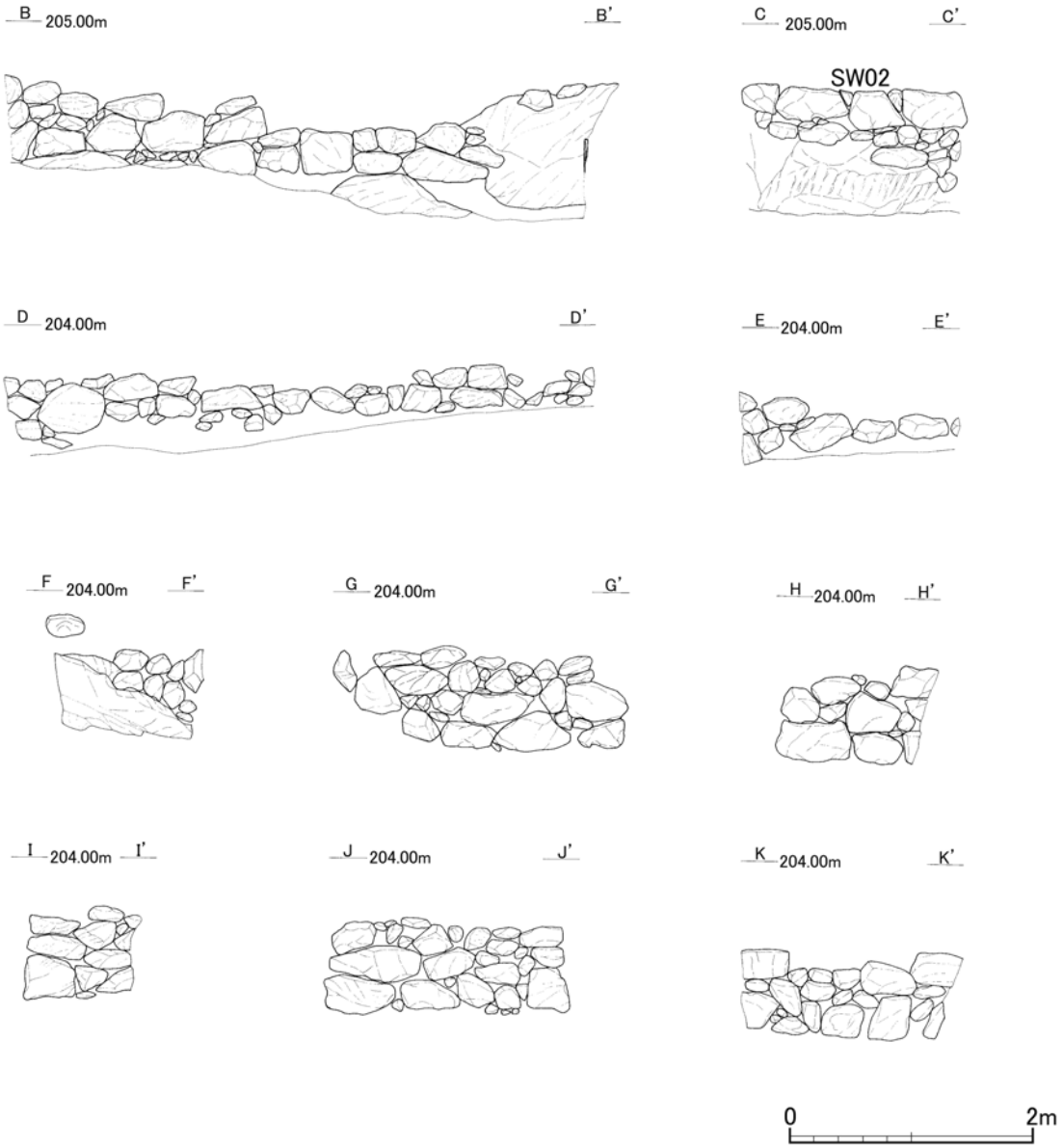


Fig. 5　大谷地区４区ＳＤ０１石積立面図（Ｓ＝１／60）

ある。東端部の天端石はなくなっているが、本来はこの位置にＳＢ０１の礎石があった可能性も考慮される。天端の標高は西端部で 203.50 m、底面の標高は東端部では 202.83 m、西端部では 202.92 mであった。Ⅰ－Ⅰ’の東端部から 90° 南に屈曲してＪ－Ｊ’につながる。Ｊ－Ｊ’は、長さ約 2.0 mで、全体に遺存状態が良好である。積石は、幅約 35 ～ 75㎝・高さ約 15 ～ 30㎝の石の隙間に、幅 20㎝未満の石を埋めるように積み上げている。天端の標高は 203.50 ～ 203.45 m、底面の標高は約 202.70 mと、この範囲内ではほとんど傾いていない。南端部で東に 90° 屈曲してＫ－Ｋ’へつながる。Ｋ－Ｋ’は、約 1.8 mの範囲を確認した。天端は東端部と西端部のみ残っており、中央部はなくなっている。残存する天端石は上面が平らになっており、いずれもＳＢ０１の礎石となる可能性がある。天端の標高は、西端部が 203.28 m、東端部が 203.30 mである。底面の標高は、202.54 ～ 202.60 mである。

４区で検出されたＳＤ０１の全体を総括すると、平坦地側の天端とＳＤ０１底面の標高は、ともに４－Ⅱ区西端から４－Ⅲ区東端までの約 11.5 mの範囲で東方に約 30㎝下がっているため、溝の機能としては西から東に向かって流すようになっている。なお、１トレンチでは底面の標高が約 203.4 mと、４区よりもやや高い。そのため、１トレンチ以西からの水も４区の東側に向けて下っていくのではないかとも推察することができ、４－Ⅲ区よりも東で南方の道方向に屈曲する可能性がある。

【ＳＢ０１】

ＳＢ０１は、１トレンチから４－Ⅲ区で検出された建物跡で、平面形はＳＤ０１に沿って「鍵形」になっている。残存する礎石から、現状では東西６間（約 11.2 m）、南北 2.5 間（約５m）の範囲を確認しているが、東西いずれにもさらに広がる可能性がある。また、ＳＢ０１内部にあたる４－Ⅰ区南端部の被熱痕は、トレンチ外南方に続いていることから、ＳＢ０１は南側へも広がっていると想定される。ただし、４区南方は現状では削平されているため、ＳＢ０１南部は消失している可能性が高い。

ＳＢ０１内部には、幅 30㎝程度の石を並べた石列（ＳＷ０９）があり、建物内が仕切られていた可能性がある。

ＳＷ０９は、４－Ⅲ区南部に位置する。東西に並ぶ基礎と、南北に並ぶ石列とが垂直に突き当たっており、ＳＢ０１内の仕切り壁の土台を据えるための石列とみられる。東西に並ぶ石列は、直径 30㎝程度の円形の石が約 1.6 mの距離で配され、その間に幅 15㎝程度の割石を６個並べている。確認はできていないが、トレンチ東の外側にも同様の石列が続いている可能性がある。南北の石列は遺存状態が悪く、東西の石列に比べて不定形で、石の大きさも揃っていない。ＳＷ０９で仕切られた４－Ⅲ区南東部の堆積土には、赤く被熱した焼土面や、焼土混じりの部分があり、区画内で火を使用していた可能性がある。また、４－Ⅲ区南東隅には要石があるが、付近に被熱痕があるにもかかわらず、石自体は被熱していない。

【ＳＢ０２】

ＳＢ０２は、４－Ⅲ区北東部に位置する、建物跡の可能性がある遺構である。区画の北東隅で、幅 20㎝程度の礎石が、1.5 mほど離れて２基確認されたのみであるため、規模や形態は把握できていない。また、付随する遺構も検出されていないため、現状では用途も不明である。この礎石はＳＤ０１の構築面に据えられており、方向も一致することから時期的に近い遺構と想定される。

【ＳＸ７０】

ＳＸ７０は、４－Ⅱ区中央部で検出された２つの石列と、その間に炭層が広がった遺構である。２つの石列の内、Ｓ０６を含む東側の石列は遺存状態がよく、ＳＤ０１南壁から南方向に約２mにわたって幅 30㎝程度の方形の割石を６基、東側に面を揃えて並べている。Ｓ０５を含む西側の石列は遺存状態が悪く、石列の長さ自体は２m程度と

かろうじて把握できるものの、石の数や面の向きは不明である。なお、東西の石列は約1.8ｍ離れている。

ＳＸ７０がＳＢ０１に伴う遺構であるならば、建物の北壁を含めて３方向に壁のある小さく仕切られた空間であったと推定される。この石列の間には一面に炭が堆積していることから、炭層の下で炉跡が検出される可能性がある。

ただし、ＳＸ７０上には上層の遺構面が堆積しており、まずはそれの調査が必要であった。時間的な制約もあり、今年度は十分な調査ができなかったため、ＳＸ７０の本格的な調査は来年度の課題としたい。

【ＳＷ０７・０８】

ＳＷ０７・０８は、４－Ⅱ区西南部で検出された石列である。いずれも幅20～30㎝程度の割石を東西に配しており、ＳＷ０７は区画西壁から約1.6ｍ、ＳＷ０８は約2.8ｍが検出された。

ＳＢ０１の範囲内で検出されたが、ＳＢ０１と構築面が異なることや、ＳＸ７０との位置関係から、時期的に新しいと判断できる。また、ＳＷ０７を境に南側の整地土には炭や焼土が多く混じっていることから、ＳＷ０７・０８が構築される前段階で周辺に所在していた炉などを壊した粘土を再利用して整地している可能性もある。

【ＳＤ１１】

ＳＤ１１は、４－Ⅱ区のＳＷ０７・０８の間で検出された溝跡である。一辺が20～50㎝程度の割石を約20㎝の幅で東西に並べている。調査範囲では、北壁が約1.5ｍ、南壁が約1.9ｍの長さでそれぞれ検出されている。検出面より、ＳＢ０１に先行しており、遺構面では３面に相当する。埋土から京焼風とみられる鉄絵のある肥前陶器（20～22）が出土しているため、ＳＤ11は17世紀代までさかのぼる可能性がある。

今年度は十分に調査ができなかったため、深さ・堆積状況の把握などについては、来年度の課題としたい。

第４節　６トレンチの調査成果

第１項　概要

６トレンチは、大谷地区の銀山川南岸側の平坦地に、南北12.6ｍ、東西1.8ｍで設定した。本トレンチを設定した箇所には平坦部が広がっており、南部の岩盤が大きく崩れていることから露頭掘りの痕跡である可能性が想定された。こうした現地の状況により、採掘や土地利用について把握できることが期待されたため、発掘調査を実施した。

調査によって、建物跡ＳＢ０３、溝跡ＳＤ１２、岩盤を掘り込んだ溝や土坑（ＳＤ１３・１４、ＳＫ１０～１２）などが検出された。なお、岩盤を加工した平坦面を埋めたのちにＳＢ０３を構築していることから、両者には時期差が認められる。

６トレンチ南端部の断面では、流土の堆積が確認できたため、６トレンチの南部は露頭掘り等の痕跡ではなく、部分的な崩落と考えられる。

第２項　検出遺構

【ＳＢ０３】

ＳＢ０３は６トレンチの北半部で検出された建物跡である。全体を検出していないものの、東西１間半、南北１間半で、１間あたりの幅が約２ｍの小規模な建物跡である。当初設定していた６トレンチの範囲から東へ延びることが確認できたため、ＳＢ０３の南部付近を東に拡張した。その結果、拡張部では礎石が二基検出され、それより東側では礎石が検出されなかった。そのため、６尺５寸を１間とした場合、ＳＢ０３の東西方向の規模は、１間半であったことが確認できた。

これらの礎石は、長軸が45～50㎝程度の石を約１ｍ（半間）間隔で並べ、それらの隙間に18～25㎝程度の石を並べている。ただし、北部は南北の柱間が約1.5ｍと広くなっている上、15～20㎝程度の礫を並べている。南半と北半を区画する目的か、基盤となる岩盤の凹凸を埋めるためなどの理由が想定される。さらに、北半部と南半部では貼られている粘土の色が異なっている。これらより、ＳＢ０３は北側に入り口などを設け、南半部を主に利用する建物であったと考えられる。

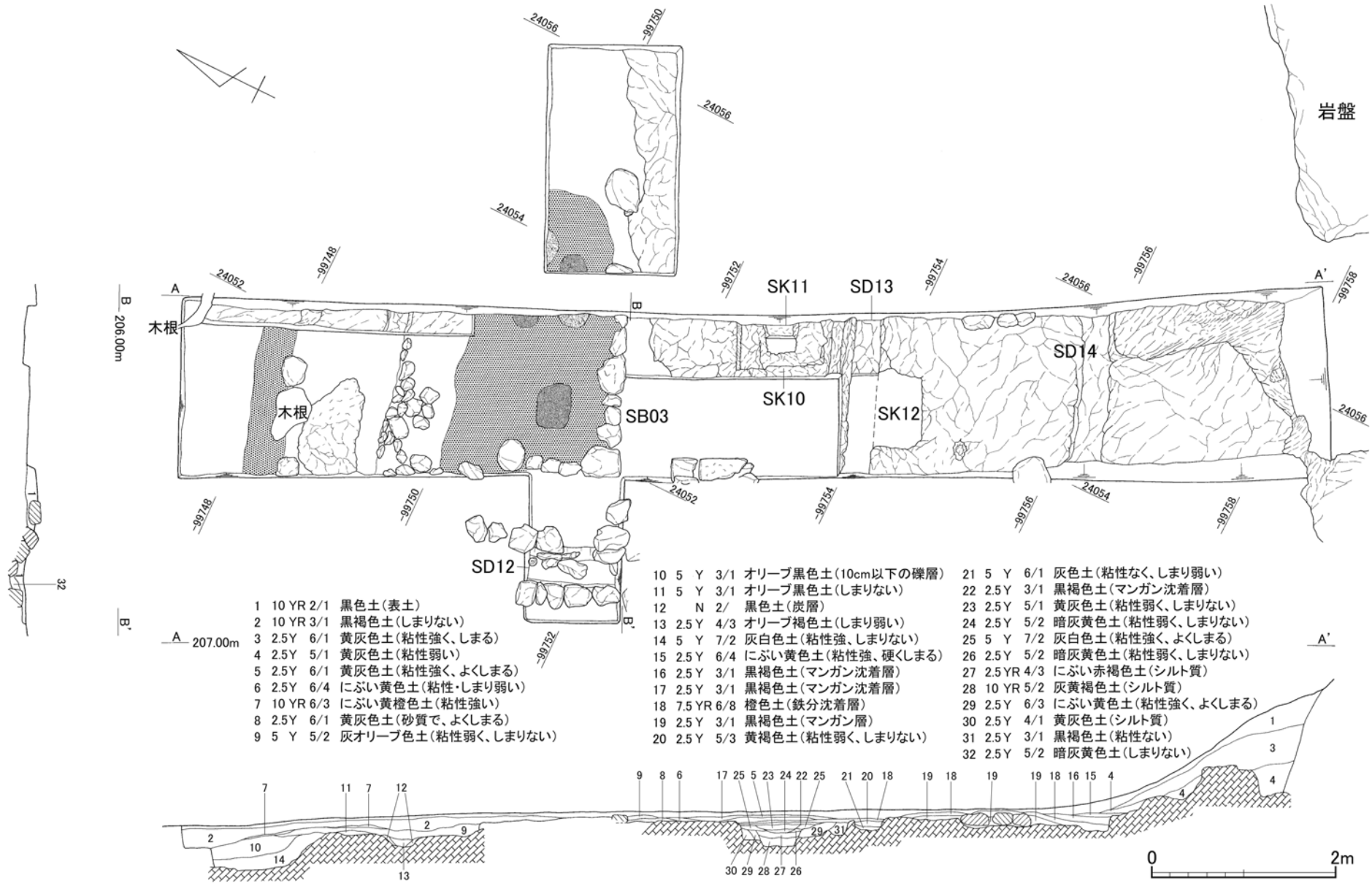


Fig. 6　大谷地区６Ｔ平面図・土層断面図（Ｓ＝１／60)

床面には粘土が貼られているほか、一部には被熱痕や炭化物の集積などが認められることから、土間面で直接作業を行っていたと判断される。そのため、ＳＢ０３は床のない簡易な建物であったとみられる。なお、検出された標高は、礎石の上面で約 205.16 ｍである。

【ＳＤ１２】

ＳＤ１２は南北方向に流れる簡易な溝で、ＳＢ０１から約１ｍ西側に所在する。分布調査の段階で一部が地表面に露出しており、排水と地割の役割を兼ねる溝と推定していた。調査により、長さ 10 ～ 30cm、高さ 20cm程度の割石を並べた溝で、南の岩盤方向から北の銀山川方向に向けて水を流す構造になっていることが確認された。

ただし、ＳＤ１２まで含めた調査区を設定すると、想定面積を大幅に超えるため、幅２ｍ程度のトレンチ調査を行い、一部を西側に拡張することで対応することとした。そのため、発掘調査では拡張した南北１ｍ程度の範囲でしか確認をしていないが、実際には本地区南部の岩盤から銀山川まで伸びていたと推定される。

【岩盤加工遺構】

上述したように、大谷地区の銀山川両岸の山裾には岩盤が広がっている。北岸部における岩盤加工遺構の内容とその展開については、昨年度の調査によって概ね把握することができた。南岸部においても、本年度実施した分布調査と環境整備によって岩盤を加工した平坦部や柱穴、階段などが確認できた。しかし、加工の及んでいる範囲が広大であるため、本書では６トレンチ内で確認できたSD13・14、SK10～12について報告する。

ＳＤ１３は、幅約 30cm、深さ約 10cmの小規模な溝である。ＳＤ１４は、平坦面南端から北に約２ｍに位置する。幅約 30cm、深さ約５cmの浅い溝で、岩盤とは平行に延びる。検出された位置から、崖からの水が平坦部へと流入するのを防ぐための溝とも考えられる。ただし、現状では非常に浅く、十分にその機能を果たせたかは疑問が残る。

ＳＫ１０は、ＳＤ１３の北側に位置する矩形の掘り込みである。規模は西辺が約 70cm、深さ約 10cmで、遺構の東部がトレンチ外のため、全体を確認することはできなかった。ＳＫ１０の底部南辺には壁面に沿って幅 25cm、深さ７cmの細い溝状の掘り込みがある。土層を観察すると、ＳＫ１０の埋土とは別の埋土（31 層）が流入していることから、この溝状遺構はＳＫ１０とは別の遺構と判断できる。また、ＳＫ１０の埋土（29 層）が本遺構の埋土を切っていることから、ＳＫ１０に先行する遺構とみられる。ＳＫ１１は、ＳＫ１０の中央部で検出された遺構である。ＳＫ１０と同じく６トレンチ内では一部のみが検出された。現状の平面形は矩形で、南北の長さは岩盤上辺で約 35cmである。東西方向は 30cmまでは確認できたが、さらに東へ続いており、全体規模は確認できなかった。土層観察では、ＳＫ１０が 29 層まで埋没した段階で上面から掘り込まれており、ＳＫ１０に後出する遺構である。掘り込み上面からの深さは約 17cmである。ＳＫ１２はＳＤ１３に南接する矩形の掘り込みである。南辺は約 70cmだが、北部はＳＤ１３によって切られており不明である。ＳＫ１０～１２は、いずれも水溜めなどの機能が推定されるが、周辺にユリカスや金属の沈殿などは確認できていない。

第５節　出土遺物

遺物としては、肥前や瀬戸など広域に流通する陶磁器の他に、在地の石見焼が多く含まれている。また、SD01は水分が多く有機物の保存に良好な環境であったためか、木製品が多く出土した。

【４区】

１・２は土師質土器の皿で、いずれも底面に糸切の痕跡がある。１は４－Ⅲ区下層の遺構面直上から、２は４－Ⅱ区の遺構面上から出土した。３は中国の青磁皿で、内面に一部釉薬がかかっていない箇所がある。４は中国の白磁皿で、高台に砂が付着している。５～７は肥前陶器の京焼風陶器碗である。６の外面口縁部付近には花の上絵付がある。８・９は石見焼の皿で、８の見込みに胎土

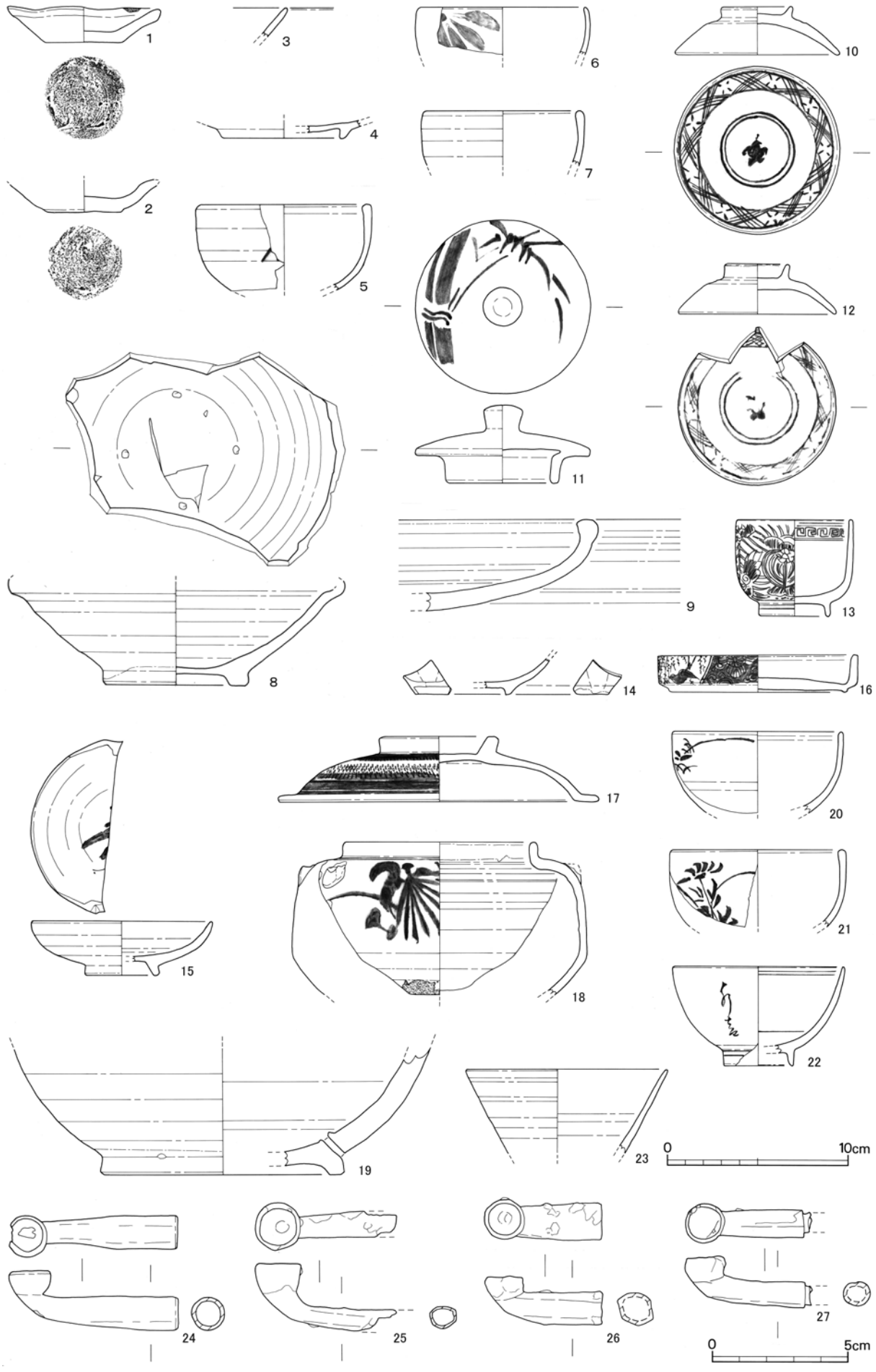


Fig. 7　大谷地区４区出土遺物実測図Ⅰ（S＝１／２・１／３）

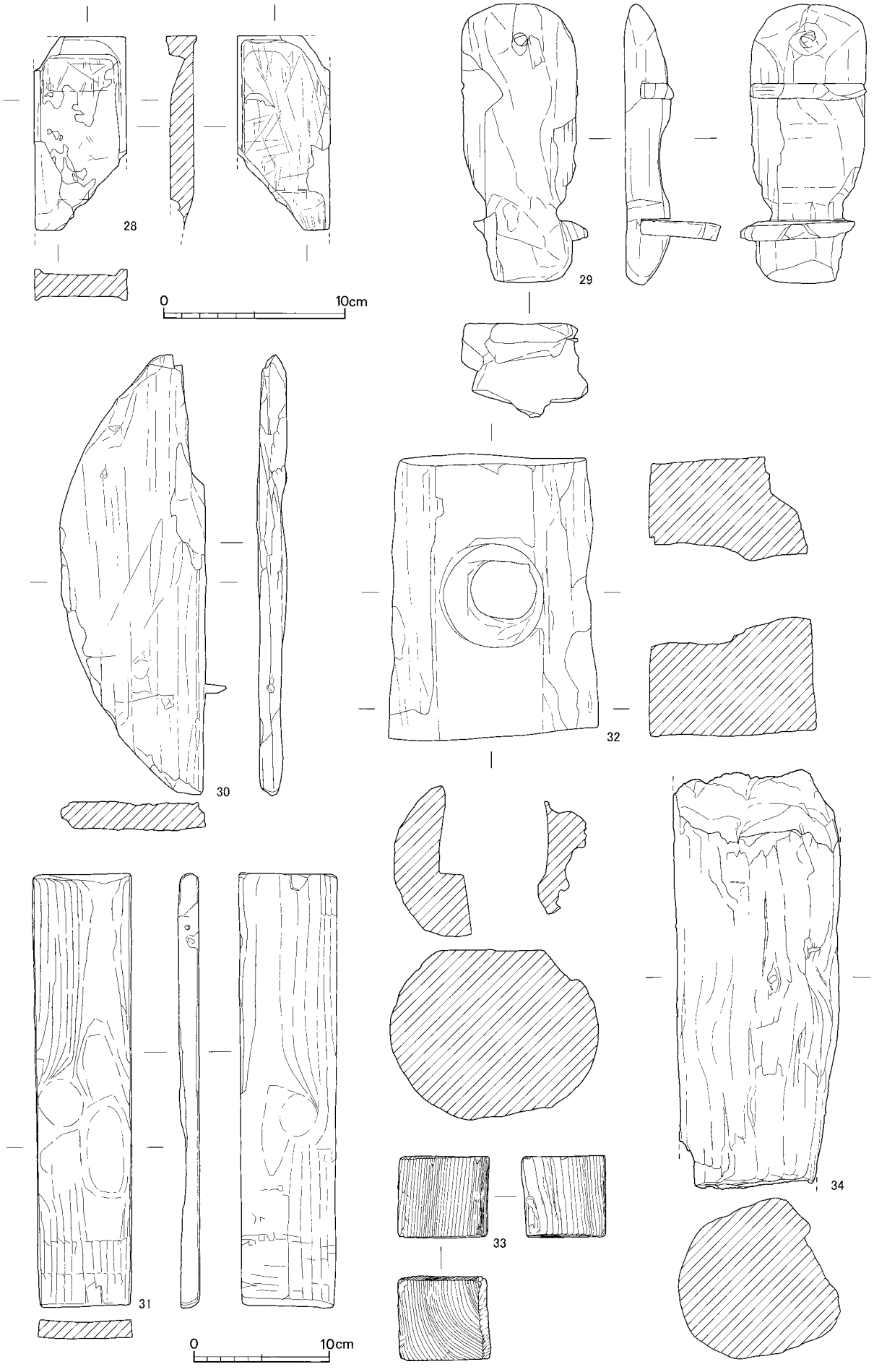


Fig. 8　大谷地区４区出土遺物実測図Ⅱ（S＝1／3・1／4）

Tab. 2　大谷地区４区出土遺物一覧表

挿図番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調・釉薬	成形・調整・文様	備考
				口径	器高	底径			
1	4-Ⅲ区下層遺構面直上	土師質土器	皿	8.4	2.0	4.2	にぶい橙色		スス付着
2	4-Ⅱ区遺構面直上	土師質土器	皿		(1.8)	4.0	にぶい橙色		
3	4-Ⅲ区下層遺構面直上	青磁	皿		(1.6)		青磁釉		中国
4	4-Ⅱ区南端サブトレ	白磁	皿		(2.0)	(6.7)	白磁釉	高台に砂付着	中国
5	4-Ⅱ区第１遺構面下炭化物層上面	肥前陶器	碗	9.4	(4.7)		透明釉		
6	4-Ⅱ区遺構面直上	肥前陶器	碗	(9.0)	2.6		透明釉	上絵付	
7	4-Ⅱ区遺構面直上	肥前陶器	碗	(8.6)	(3.0)		透明釉		
8	4-Ⅲ区遺構面直上	石見	皿		(5.8)	7.8	長石釉	胎土目	
9	4-Ⅲ区遺構面直上	石見	皿		(5.0)		長石釉		
10	4-Ⅲ区下層遺構面直上	肥前磁器	蓋	8.8	2.7	つまみ径 3.7	内) 透明釉 外) 青磁釉	四方襷文 外青磁	
11	4-Ⅱ区炭化物層上面黄色土	肥前陶器	蓋	6.0	4.3	つまみ径 2.2	透明釉	陶胎染付	
12	4-Ⅱ区炭化物層上面	肥前磁器	蓋	8.5	2.8	つまみ径 3.3	内) 透明釉か 外) 青磁釉か	四方襷文	被熱している
13	4-Ⅱ区ＳＤ０１	肥前磁器	湯のみ	(6.2)	5.3	3.7	透明釉		
14	4-Ⅱ区ＳＤ０１	青磁	皿		(1.9)		青磁釉		中国
15	4-Ⅱ区ＳＤ０１・ＳＤ０１上層	石見	皿	(10.0)	3.0	(4.0)	長石釉		見込みに文字
16	4-Ⅰ区ＳＤ０１中～下層	肥前磁器	段重	10.5	2.1	9.5	透明釉		
17	4-Ⅱ区ＳＤ０１上層	石見	蓋	17.6	3.6	つまみ径 5.4	外) サビ釉	刷毛目 飛鉋	
18	4-Ⅱ区ＳＤ０１	不明陶器	土瓶	(10.2)	(8.4)		透明釉		スス付着
19	4-Ⅱ区ＳＤ０１	肥前陶器	壺か		(7.0)	(13.0)	灰釉		
20	4-Ⅱ区ＳＤ１１炭化物層	肥前陶器	碗	(9.1)	(4.5)		透明釉	鉄絵	
21	4-Ⅱ区ＳＤ１１炭化物層	肥前陶器	碗	(9.2)	(4.3)		透明釉	鉄絵	
22	4-Ⅱ区ＳＤ１１炭化物層	肥前磁器	碗	(9.3)	5.5	(3.8)	透明釉		
23	4-Ⅱ区ＳＤ１１粘質土上面	肥前陶器	鉢か	(10.0)	(4.7)		透明釉		
挿図番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
24	4-Ⅱ区旧表土層	銅製品	キセル (雁首)	6.2	1.5	2.2		13.7	
25	4-Ⅱ区第１遺構面下炭化物層上面	銅製品	キセル (雁首)	5.2	1.8	2.5		5.2	
26	4-Ⅱ区第１遺構面下炭化物層上面	銅製品	キセル (雁首)	4.3	1.6	1.8		8.1	
27	4-Ⅱ区第１遺構面下炭化物層上面	銅製品	キセル (雁首)	4.6	1.5	1.9		5.2	
28	4-Ⅱ区ＳＤ０１	石製品	硯	10.7	5.1	1.7	赤灰色	134.0	赤間硯か
29	4区ＳＤ０１	木製品	下駄	20.4	9.2	6.9			差歯下駄
30	4-Ⅰ区ＳＤ０１	木製品	桶の底板	32.1	12.1	2.2			竹釘あり
31	4区ＳＤ０１	木製品	桶の側板	31.7	7.2	1.5			釘跡あり
32	4-Ⅱ区ＳＤ０１	木製品	継手か	21.0	15.3	12.4			
33	4-Ⅱ区ＳＤ０１	木製品	不明	6.0	6.8	6.2			方形加工製品
34	4-Ⅱ区ＳＤ０１上層	木製品	柱材	30.7	12.2	11.8			

目がある。10は肥前磁器で、外青磁碗の蓋である。内面には、口縁部付近に四方襷文が、中央部に２条の圏線とコンニャク印判による五弁花文がある。11は肥前陶器で、陶胎染付の蓋である。外面に竹とみられる染付があり、内面は露胎である。12は肥前磁器で、10と同様の資料である。内外面とも被熱しており、釉薬が飛んでいる。13は肥前磁器の湯のみである。14は中国の青磁皿である。15は石見焼の皿で、見込みに鉄絵の「寿」とみられる文字の一部がある。同様の資料が昆布山谷地区第５地点でも出土している。16は、肥前磁器の段重で、外面には型紙摺りによる染付と、植物文の上絵付がある。上絵付は印判によるため、近代まで下る資料である。17は石見焼の蓋で、外面には刷毛目と飛鉋による文様がある。18は産地不明だが、内面と底部には釉薬がかかっていないことや、底部にススの付着が認められること、欠損しているが把手の痕跡があることなどから土瓶とみられる。19は肥前陶器である。内面に釉薬がかかっていないため、壺等の可能性がある。高台の脇に、焼成前に穿孔された直径３㎜程度の小さな穴があり、水などが溜まらないようになっている。20・21はいずれも肥前陶器の碗で、外面に鉄絵がある。22は肥前磁器の碗である。外面には体部に「水音」とも読める染付の文字があり、高台付近に３条の圏線が、内面には口縁付近に２条、見込みに１条の圏線がある。23は肥前陶器で、鉢の可能性がある。24 ～ 27は銅製キセルの雁首である。いずれも脂返しが退化しており、首と火皿が直接つくタイプである。

28は凝灰岩製の硯で、暗赤褐色で緻密な石材を使用していることから赤間硯の可能性がある。摺面には墨が付着している。29は差歯下駄である。長さ20.4㎝で、幅はつま先側が9.2㎝、かかと側が約８㎝である。差歯は前後とも残ってはいるが、後側が比較的良好な遺存状態で、一部は歯先まで残っている。差歯は幅約１㎝、高さ約5.5㎝で、台から約４㎝高くなっている。台の裏側は船底状に緩くカーブするように加工されている。30は半円形の板状に加工された木製品で、木桶の底板である。側面に、板をつなぐための竹釘が一つ残っている。31は短冊形の板状に加工された木製品で、縦方向にわずかに反って丸みを帯びていることや、側面に釘跡があり、底板の痕跡が残ることから、桶の側板とみられる。32は太さ12 ～ 15㎝程度の丸太を長さ21㎝に切り、中央に円形の穴が空いた木製品である。穴の径は前後で異なっており、大きい方が約7.5㎝、小さい方が約５㎝で、穴同士が接する部分で段状になっている。太さの異なる竹などを、穴の両側から差し込んでつなぐための継手の可能性がある。33は一辺が６㎝程度の立方体に加工された木材である。四角く加工したのみで穴や凹みなどはなく、目的・用途は不明である。34は柱材の一部とみられる。丸太の皮をはぎ、節は切除しているものの、大きく製材・加工はしていない。底面に切断痕が残っており、柱の根本部分と思われる。

【６トレンチ】

35は石見焼の碗で、見込みに胎土目がある。36・37は瀬戸の新製焼である。36は湯のみで、外面には印判による松と鶴の文様がある。37は坏である。38は小坏で、瀬戸の新製焼の可能性があるが、十分に判別できない。外面に印判による唐草と「都」の文様がある。39・40はいずれも石見焼の蓋である。41は産地不明だが、体部外面及び底部にススが付着していることから鍋とみられる。42はすり鉢である。スリ目の上部をナデ消していない特徴は、山口県の須佐焼と共通しているが、胎土が異なる。口縁部にススが付着している。43は土師質土器の火鉢である。44は磁器製の人形である。首を欠損しているが、着物は割烹着のような格好で、右手には果物の入ったかごを持っている。瀬戸の新製焼の可能性がある。45は羽口で、口の付近に付着物があるほか、被熱によってごく一部に自然釉が出ている。46は細長い方柱状の蝋石で、両端部が使用によって摩耗している。47は方錐状の鉄製品で、和釘の可能性がある。48は銅製キセルの雁首で、脂返しが退化し、首と火皿が直接つくタイプである。

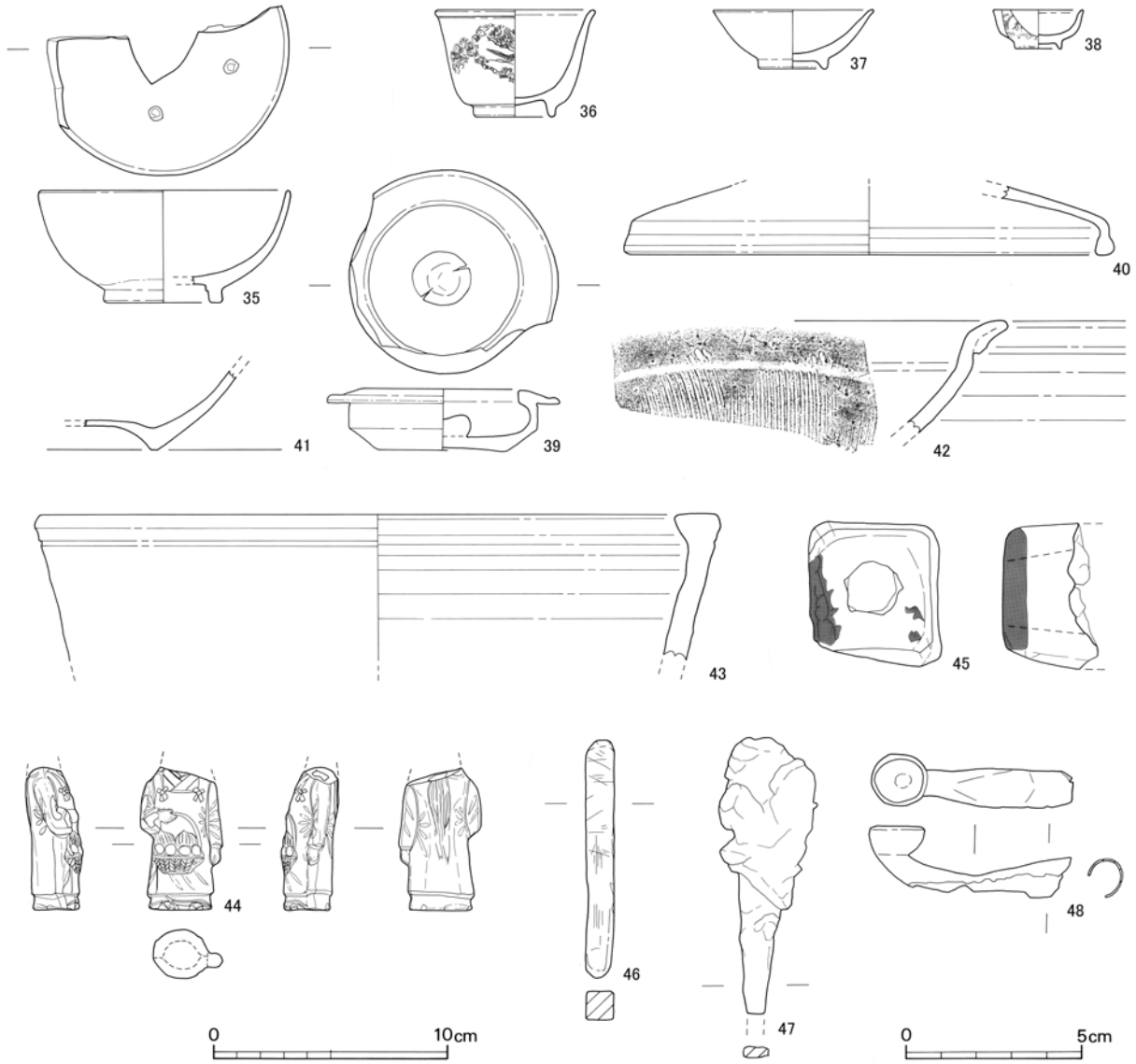


Fig. 9　大谷地区６Ｔ出土遺物実測図（Ｓ＝１／２・１／３）

Tab. 3　大谷地区６Ｔ出土遺物一覧表

挿図番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調・釉薬	成形・調整・文様	備考
				口径	器高	底径			
35	６Ｔ表土	石見	碗	(10.4)	4.8	4.9	褐釉	胎土目	
36	６Ｔ１～２層	瀬戸	湯のみ	(6.6)	4.6	3.2	透明釉		
37	６Ｔ２層	瀬戸	坏	6.8	2.5	2.8	透明釉		
38	６Ｔ２層	不明磁器	小坏	(3.8)	1.7	1.9	透明釉		
39	６ＴＳＤ 12	石見	蓋		2.6	5.4	長石釉		
40	６Ｔ１～２層	石見	蓋	(20.2)	(2.9)		長石釉		
41	６Ｔ１～２層	不明陶器	鍋		(3.4)		にぶい橙色		スス付着
42	６Ｔ第１遺構面	不明陶器	すり鉢		(4.8)		灰褐色		スス付着
43	６Ｔ１～２層	土師質土器	火鉢	(28.8)	6.2		淡黄色		
挿図番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
44	６Ｔ表土	不明磁器	人形	6.1	3.5	2.5	透明釉		
45	６Ｔ赤褐色土	土製品	羽口	4.0	6.2	1.1 ～ 1.5	にぶい橙色	103.4	
46	６Ｔ表土	石製品	蝋石	6.7	0.8	0.8	灰白色	11.5	
47	６Ｔ表土	鉄製品	釘か	7.8	2.7	1.9		33.8	
48	６Ｔ赤褐色土№２	銅製品	キセル（雁首）	5.7	1.5	最大高 1.9		4.5	

第３章　温泉津地区 内藤家地点の調査

第１節　調査にかかる経緯

内藤家は、江戸期に庄屋などを務めた温泉津の有力な商家であった。昭和 16（1941）年頃まで酒造業を営んでいたことが知られており、今回調査対象となった土蔵は八番蔵と称されていた。

この八番蔵は、倒壊の危険が生じていたため、保存修理が実施される事となり、その建物の来歴や、土地の履歴を明らかとすることを目的として、建物内の試掘調査を行うこととなった。

なお、内藤家の建物は令和元（2020）年 12 月 26 日に大田市の指定文化財となっている。

第２節　調査の概要

調査は、建物内に残されていたバラスを除去し、旧土間面を検出することから行った。トレンチ設定予定地のバラスを除去した段階で、男柱と推定される柱根が検出されたので、この柱根の位置で土層観察が行えるようトレンチを配置した（１トレンチ）。２トレンチは１トレンチの延長線上で、蔵の中央付近に設定した。また、調査の過程で、石列が検出されたので、この石列の延長線上に当たる推定位置に、３トレンチを設定した。

また、調査開始時点で、蔵の南西側で、石造りの半地下遺構が顕在化していた。遺構内部には、方形に加工された２種類の石が充填されており、この方形の石の上には、工事の際に建物を保持するための一時的な補強柱が設置されていた。この遺構は酒造に関連すると推定されたものの、用途が不明であったため、ＳＸ０１として調査することとした。しかし、方形の石を全て撤去すると、補強柱に重大な影響を及ぼす危険があったため、方形の石の除去は、ＳＸ０１の北側の一部のみとして調査を行った。

これらの調査により、酒造用の男柱と思われる柱穴および垂壺・石列遺構、延享４（1747）年の温泉津大火の痕跡や大火後の処理遺構などが検出された。

第３節　調査成果

第１項　検出遺構

【１トレンチ】

１トレンチは、建物南側で南北に長さ 2.5ｍ、幅 70㎝の規模で設定した。バラスを除去した段階で、男柱とみられる柱根（ＳＰ０１）と柱穴（ＳＰ０２）が各１基検出された。

ＳＰ０１は、建物南東側で検出された方形の柱穴で、内部に柱根が残る。柱穴は一辺が最大で約 24㎝の方形を呈するが、西側の壁面は土圧により歪んでいる。柱根は残存するものの、腐食のため原形を止めていない。柱穴の周囲には一辺 45㎝程の隅丸方形状の掘方が確認でき、本来は八寸角（約 24㎝）の柱であったと考えられる。柱穴は、現状で深さが約 18㎝残存するのみである。

ＳＰ０２は、ＳＰ０１の南約１ｍの位置で検出された一辺 21㎝程の方形の柱穴である。埋土には褐色でサラサラの土が流入しており、半截して掘下げることができなかったため、初期段階で完掘した。柱穴は北面と南面の中間部分に、建物方向と平行な横穴が水平に開けられており、南北にそれぞれ 20㎝程掘られていた。横穴は直径 15㎝程度で、この部分に柱を貫通させた横木が設置されていたと考えられる。また、柱穴北側には、横穴に向けて直径 10㎝程度の穴が斜めに２本開けられており、横木に接続する杭状のものが差し込んであったと考えられ、柱穴としては複雑な構造をしている。柱穴南側の横木直上には直径 30㎝程度の石が設置されており、重石の機能を有していたと考えられる。柱穴の深さは現状で 45㎝程度で、一辺７寸角（約 21㎝）の柱であったと推測される。複雑な地下構造を有し、地面に直接掘られた掘立柱であることなどからＳＰ０１と共に、男柱であったと考えられる。

【２トレンチ】

２トレンチは、建物中央やや東よりの位置で南

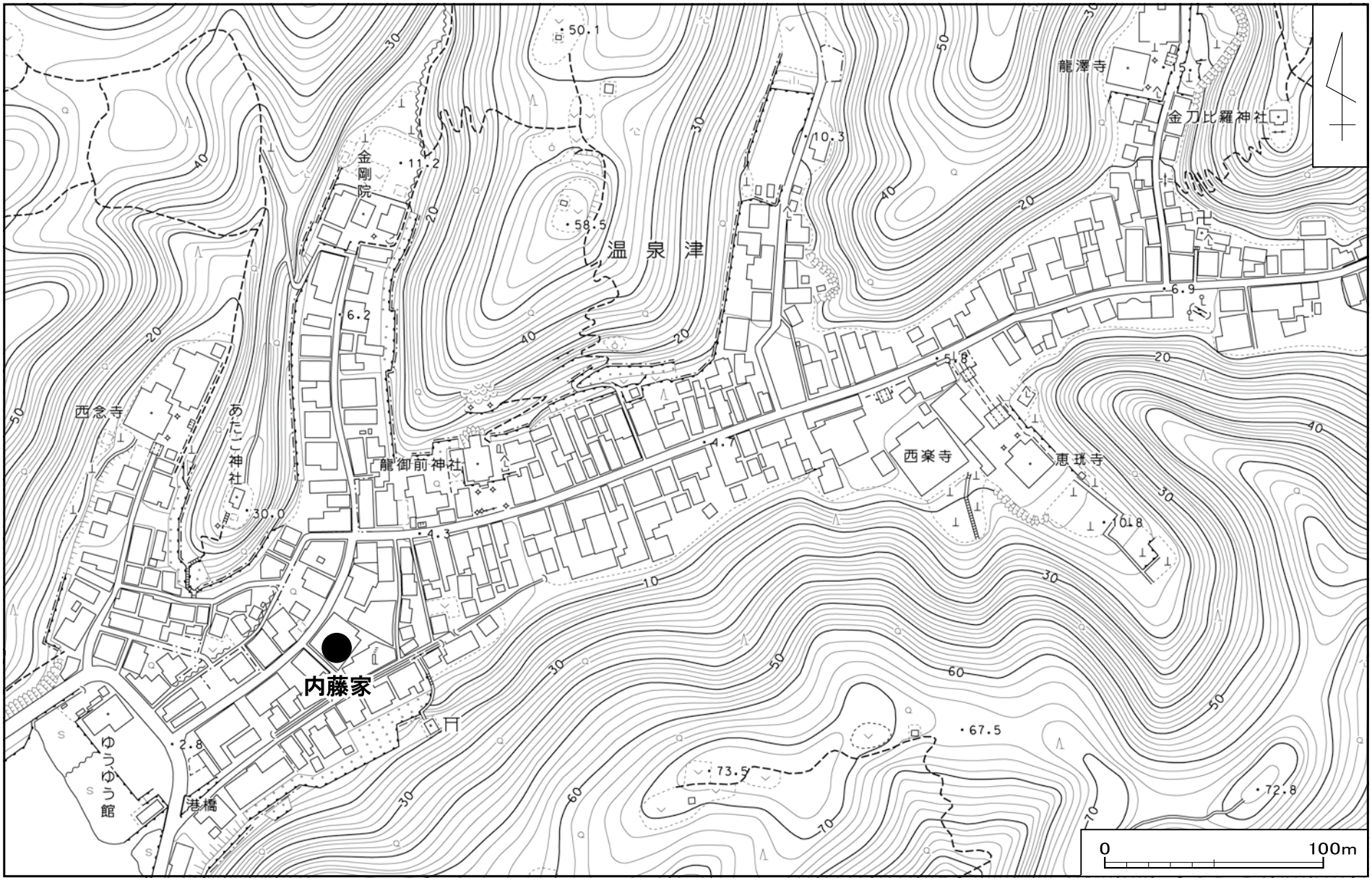


Fig.10　温泉津地区内藤家地点位置図（Ｓ＝１／2,500）

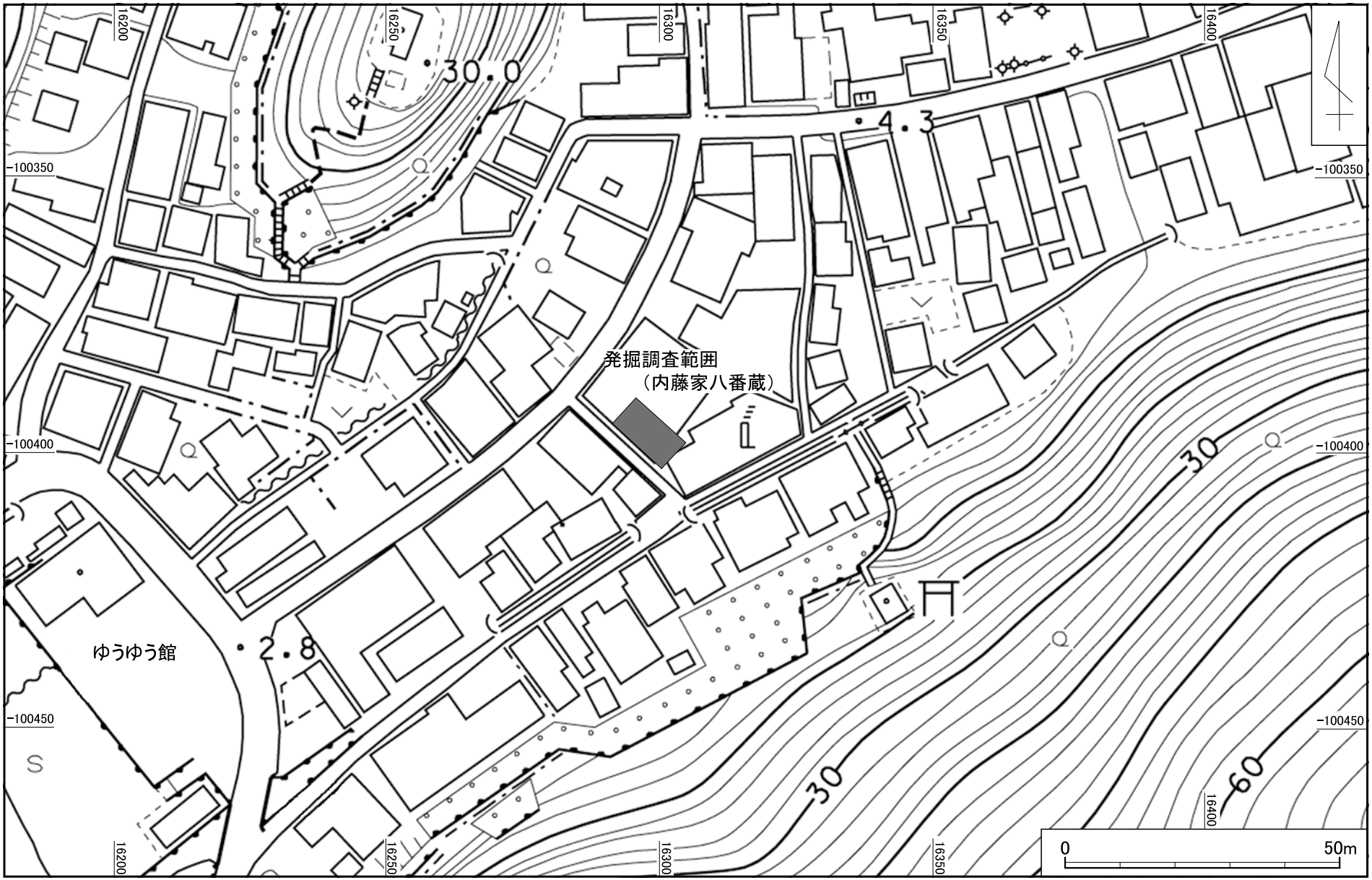


Fig.11　温泉津地区内藤家地点調査区配置図（S＝1／1,000）

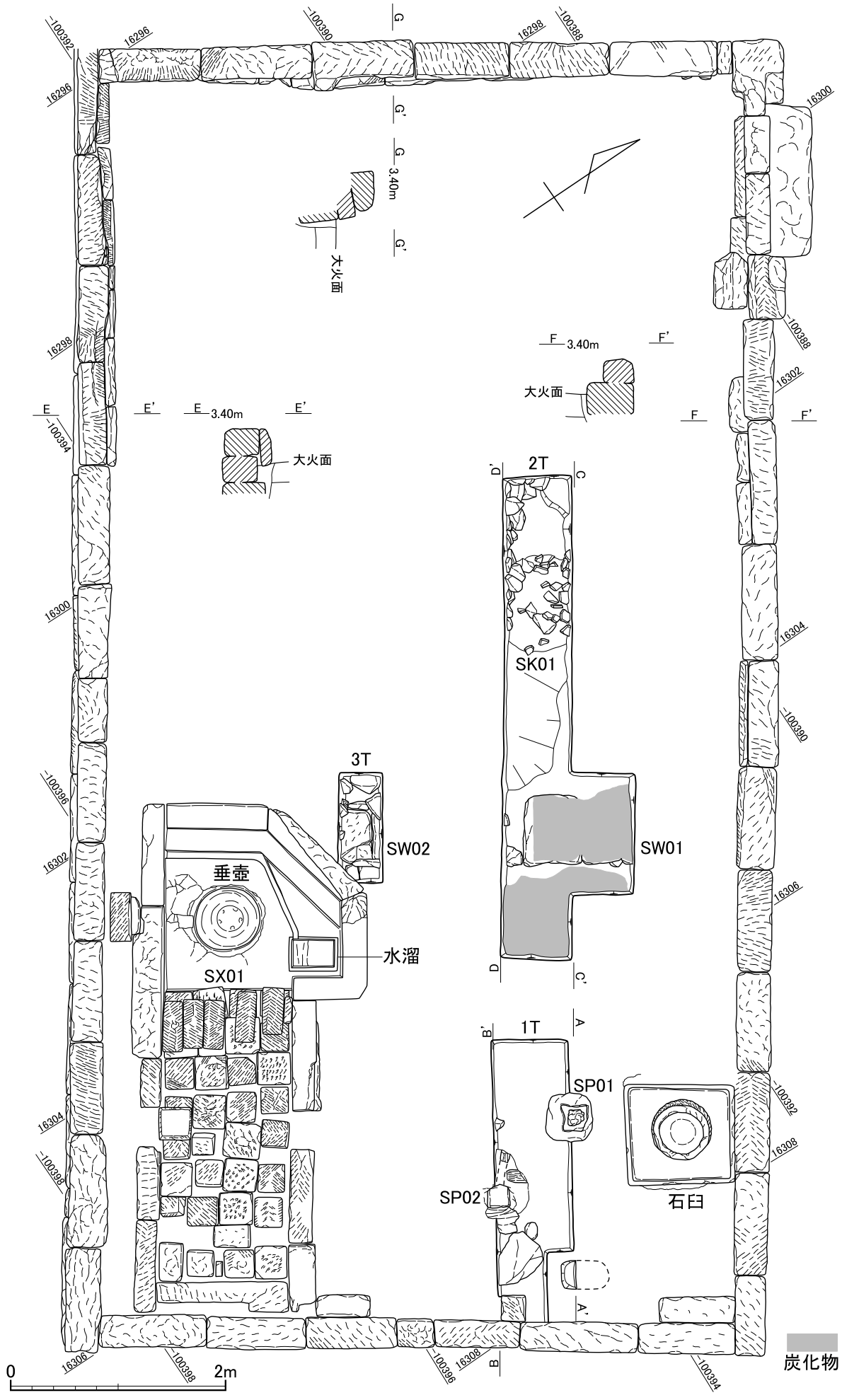


Fig.12　温泉津地区内藤家地点土蔵平面図（S＝1／50）

北に設定した調査区で、規模は南北 4.5 m、幅 60 cmである。

トレンチ南端では、表層を除去した段階で、炭層の広がりを確認した。炭層の下では、幅約 70 cmの石列（ＳＷ０１）が検出された。東西方向に延びるため、調査区を東側に 60cm拡張してＳＷ０１の検出を行った。ＳＷ０１は、拡張部分の端まで延びており、上面には炭化物層が広がっていた。ＳＷ０１によって、南北に 10cm程度の段差を形成しており、炭層はこの段差上にも広がっていた。この炭層の上層では、18 世紀代の陶磁器（53・55・61）が出土しており、延享４（1747）年の温泉津大火の痕跡である可能性が高い。ＳＷ０１については、大火直前の遺構と考えられる。また、２トレンチの約 1.1 m西側に設定した３トレンチでも、ＳＷ０１に続くと考えられる石列（ＳＷ０２）が検出された。ＳＷ０１は、上面が平らになった石を配置していることや、幅が約 70cmであること、南側と約 10cmの段差を有していることなどから、建物や築地塀等、構築物の基礎と考えられるが、検出面積が狭く、明確な性格までは確認できなかった。また、２トレンチ西端部では一旦途切れており、この部分には炭化物が堆積していることから被災時には開口していたと考えられ、通路や出入口の可能性がある。

ＳＷ０１のすぐ北側からトレンチ北端部にかけて、土坑状の大きな落ち込み（ＳＫ０１）が検出された。大きな遺構のため、全体の規模、形態は確認できなかったが、埋土はほとんどが灰白色のきめの細かい砂で占められており、底面付近では火を受けた燻瓦が出土している。また、現状で、不定形な形状を呈していることや、底面で火を受けた瓦が出土したことなどから、大火後の処理遺構と考えられる。検出状況から、大火により発生した瓦礫などを処理するために、大きな土坑を掘り、瓦礫を投入した後、砂を充填し、その上を明黄色粘土でタタキとしたと推定される。

【半地下遺構（ＳＸ０１）】

建物南西部で確認した大型の遺構である。規模は南北約 4.7 m、東西約 1.8 mで、長方形を呈し、北側の東部を一部拡張している。建物に影響を及ぼさない範囲で、北側の一部の石を除去しての調査を行った。充填されていた方形の石については、酒造に使用する重石の可能性が推定されるものの、大量にあるため明確にはできない。

調査の結果、ＳＸ０１は、本来延石で構築された半地下遺構であったものを、近代以降にモルタ

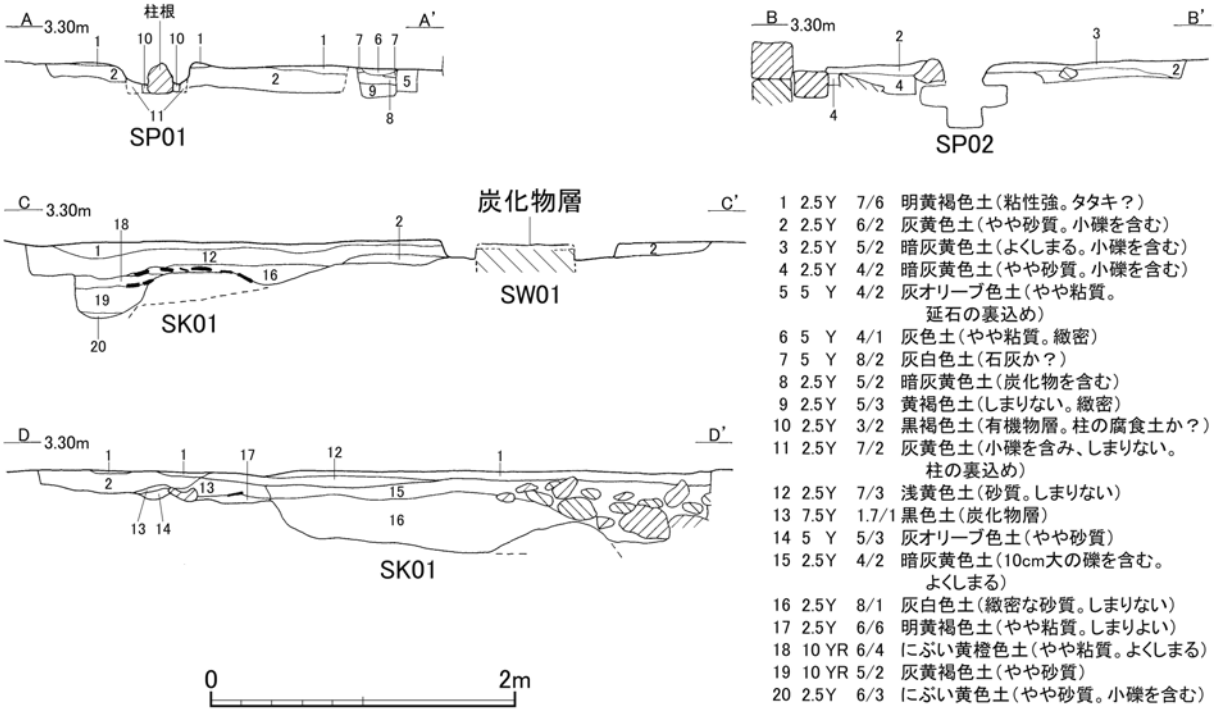


Fig.13　温泉津地区内藤家地点土層断面図（Ｓ＝１／50）

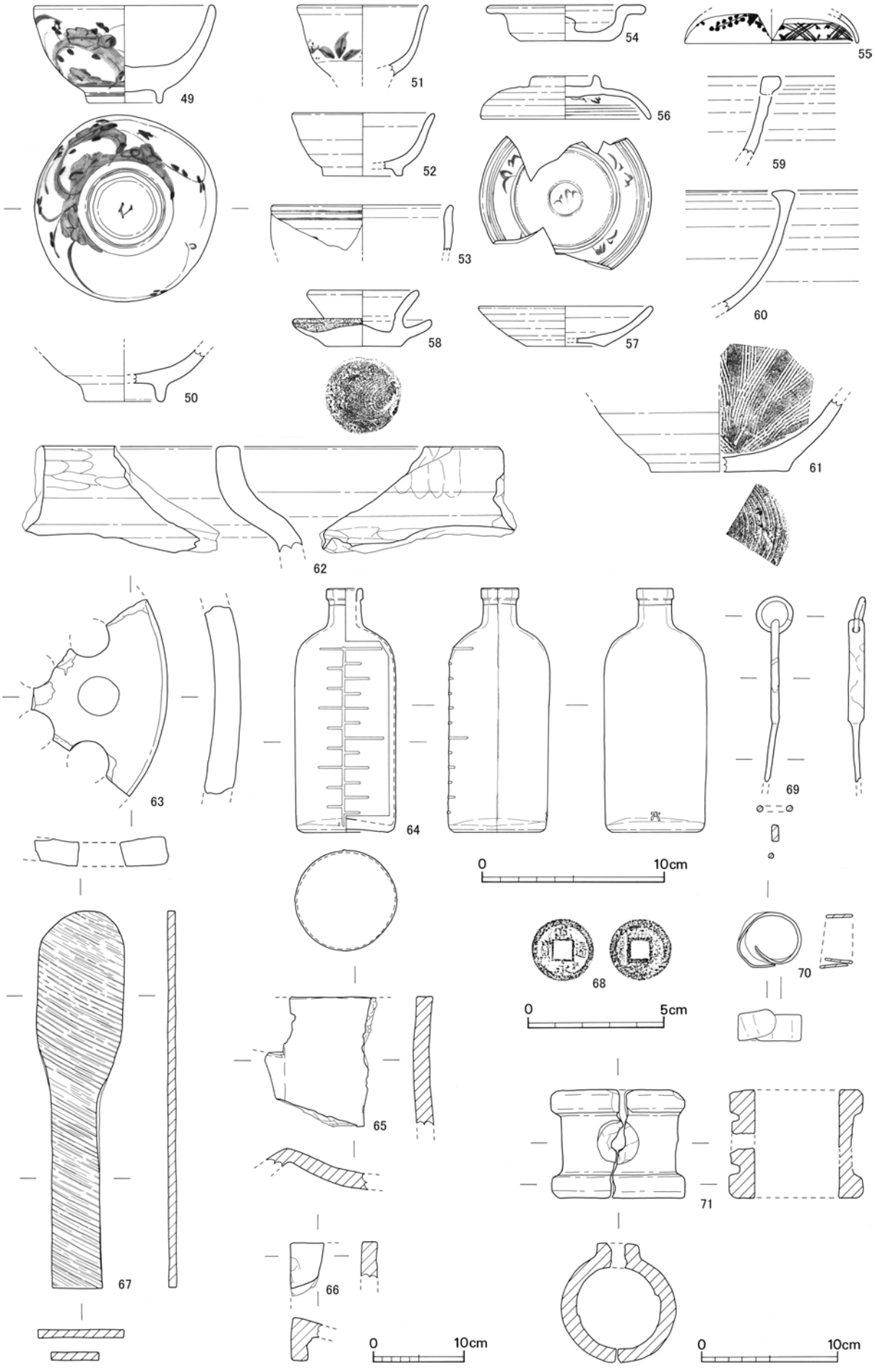


Fig.14　温泉津地区内藤家地点出土遺物実測図（S＝1／2・1／3・1／4・1／6）

ルで塗りこめられたものと判明し、北側底面には石見焼の甕が埋設されていた。また、東側拡張部分の底面には、45㎝× 30㎝程度の方形の遺構があり、水溜と考えられる。底面北端から水溜に向けて細い排水溝が切られており、水溜に流れ込む構造をしている。こうした状況から、埋設された甕は、酒造に使われる垂壺の可能性が高い。

この他、建物基礎の状態を確認するため、建物北側の３か所で基礎石の確認調査を行ったところ、基礎は２・３段の延石を積み上げて構築されていた。また、建物西側の基礎石は、そのまま側溝の石垣へとつながっていた。基礎石の構築面は、建物東側にある主屋の土間面より低く、当該建物は主屋に先行して建築された可能性がある。

第２項　出土遺物

遺物の半数以上は表土の除去中に出土したもので、建物の年代を示すものではない。この表土から出土したものは、肥前磁器の碗（49）、肥前陶器の灯明皿（58）、石見焼の碗（52）、皿（57）、蓋（54）、鉢（60）瀬戸新製焼の蓋（56）などで、土製品のサナ（63）、不明金属製品（70）や銭貨（寛永通宝）（18）もある。遺構に伴うものでは、炭化物層上層から出土した肥前磁器の碗（50）、蓋（55）、香炉（53）、不明陶器のすり鉢（61）、燻瓦（65･66）がある。ＳＸ０１内からは、ガラス製薬瓶（64）、垂壺内からは木製杓子（67）や用途不明の金属製品（71）等が出土している。これらは酒造業を廃業した後に廃棄されたと推定される。

Tab. 4　温泉津地区内藤家地点出土遺物一覧表

挿図番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調・釉薬	成形・調整・文様	備考
				口径	器高	底径			
49	表土	肥前磁器	碗	9.8	5.4	4.0	透明釉		
50	２Ｔ焼土層上面	肥前陶器	碗		(2.8)	(4.2)	灰釉		
51	表土	不明磁器	湯のみ	7.0	(3.9)		透明釉	上絵付	
52	表土	石見	小碗	(7.6)	3.5	(4.4)	長石釉		
53	２Ｔ焼土層上面	肥前磁器	香炉	(9.8)	(2.5)		透明釉		
54	表土	石見	蓋	直径 8.7	2.0	5.0	褐釉		
55	２Ｔ焼土層上面	肥前磁器	蓋	9.4	1.6		透明釉	四方襷文	
56	表土	瀬戸か	蓋	9.2	2.4	3.5	透明釉	蛇ノ目釉剥ぎ	
57	表土	石見	皿	9.4	2.2	4.3	長石釉		
58	表土	肥前陶器	灯明皿	6.0	3.1	4.2	サビ釉		スス付着
59	表土	不明陶器	鉢		(4.3)		褐釉		
60	表土	石見	鉢		(6.7)		長石釉		
61	２Ｔ焼土層上面	不明陶器	すり鉢		(4.0)	(7.6)	褐釉		
62	１Ｔ整地層	瓦質土器	甕か		(5.8)		灰色		
挿図番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
63	表土	土製品	サナ	10.9	7.5	2.0	上）灰黄褐色 下）にぶい黄橙色		
64	ＳＸ０１	ガラス製品	瓶	口径 1.9	器高 13.4	底径 4.6		表）メモリ 裏）大	薬瓶
65	２Ｔ焼土層上面	瓦	桟瓦	14.2	12.3	4.8	灰色	360	燻瓦
66	２Ｔ焼土層上面	瓦	袖瓦	5.8	3.7	4.8	灰色	82.8	燻瓦
67	垂壺内	木製品	杓子	41.3	9.6	0.9			
68	表土	銭貨	寛永通寶	2.2	2.2			2.6	新寛永
69	４Ｔ整地層	銅製品	不明	6.8	1.4	0.6		4.9	
70	表土	金属製品	不明	2.0	2.4	1.2		5.2	
71	垂壺内	金属製品	不明	7.9	9.9	9.9		1710	

第４章　総括

第１節　本年度の調査成果

第１項　大谷地区

本年度は大谷地区発掘調査の２年目である。昨年度の調査によって、調査地南部東側に設定した４トレンチで製錬に関連する遺構の存在が想定されていたため、その周辺の発掘調査を実施した。調査により、江戸時代後半には東西６間以上、南北2.5間以上の大きな礎石建物跡（ＳＢ０１）があったことが確認できた。この建物内には割石を並べた石列がいくつかあり、壁の土台を乗せる基礎石とみられることから、建物内が壁によって仕切られていた可能性がある。また、ＳＢ０１の北部に位置するＳＸ７０では炭が集中していたため、その下に炉跡が遺存している可能性がある。

今回検出された吹屋の可能性の高い建物跡（ＳＢ０１）は、東西６間以上と推定される。明治期に、前代の製錬施設一式を引き継いだ藤田組が所有していた２か所の製錬所は、いずれも９間×４間であったとの記録が残っており、今回の調査成果ともあわせて当時の吹屋（製錬所）は長大な建物としていた可能性がある。

４区における製錬関連遺構の確認は昨年度からの課題ではあったが、複数の遺構面が検出されたため、下層まで調査することができなかった。今年度の成果を整理した上で調査対象箇所を選定し、来年度の調査へとつなげたい。

昨年度は１トレンチで検出されていた、岩盤と平坦地を区画する石積の溝跡（ＳＤ０１）は、４区でもその続きが検出された。昨年度の段階では、ＳＤ０１は水を銀山川方面に排水するために、どこかで南方に向けて屈曲している可能性を考慮し、４－Ⅱ区辺りの敷地境で屈曲することを想定していた。ところが本年度の調査では、ＳＤ０１は４区東端まで延びていることが明らかとなった。しかも、検出された範囲では天端・底面とも東へ向かって低くなっていることが確認された。４－Ⅱ区付近で南へ屈曲するのであれば、東西から水が流れ込む構造としないと効率的に水が排出できないため、１トレンチと４－Ⅱ区の間に南へ延びる溝があるとは考えにくい。そのため、ＳＤ０１は４区よりも東で銀山川へと排水するのではないかと推定される。ただし、現状ではあくまでも推定でしかないため、排水経路の確認は来年度の課題としたい。

また、ＳＤ０１は４－Ⅲ区で「鍵形」に屈曲しており、排水路としては不自然な構造をしている。この「鍵形」に屈曲している北東の位置ではＳＢ０２が検出されており、構築面・方向が一致している。このことから、ＳＤ０１とＳＢ０２は同時期に存在していたと考えられ、ＳＢ０２の性格や規模は不明ながら、ＳＤ０１はこのＳＢ０２をかわすために「鍵形」に屈曲して構築されたと考えられる。

第２項　内藤家地点

内藤家地点では、建物の保存修理工事に際して八番蔵の発掘調査を実施した。調査によって、内藤家の家業の一つである酒造に関連する遺構として、撥木搾りの男柱とみられる柱穴（ＳＰ０１･０２）や､作業場･垂壺（ＳＸ０１）などが、当地の土地履歴に関連する遺構として、上面に炭の付着した石列（ＳＷ０１）と、被熱した燻瓦が入った土坑（ＳＫ０１）が検出された。

男柱や垂壺が検出されたことにより、八番蔵では酒造の作業でも、酒搾り工程が行われていたと推定される。さらに､柱穴は２つあることから、八番蔵内で、酒槽など酒造施設の位置を変えて作業していた可能性もある。ただし、内藤家に伝わる撥木は巨大で、検出された20数㎝の男柱では何か仕掛けが無い限り保持できないのではないかと思われる。ＳＰ０２には、男柱を支えるための横木の痕跡とみられる横穴と重石があり、ＳＰ０１よりも頑丈なつくりになっているが、それで

も大きな撥木を支えるには不十分と推定される。上述したように、八番蔵内では酒造関連施設の配置換えが行われていた事が想定されるため、撥木に対応する太い男柱が未調査部分に所在している可能性が残る。調査範囲では酒槽の痕跡も未確認であり、ＳＸ０１の全体を確認していないことからも、未調査範囲にはまだ遺構が残存している可能性がある。

ＳＸ０１とその周辺の槽状の遺構は、現在では表面をモルタルで固めているが、元々は石造の設備であったとみられる。この中には２種類の方形加工石製品が大量に充填されていた。この石製品は、一つは長さ約 50cm、幅約 25cm、厚さ約 10cm の直方体で、小口面に四角い穴が穿たれたもの、もう一つは一辺が 30cm程度の台形で、向かい合う２面の側面に三角形の穴が穿たれたものである。これらは撥木に吊るす重石の可能性があるが、数が多いため、重石以外に別の用途で使われていた可能性もある。

ＳＷ０１とＳＫ０１は、いずれも現在の建物には直接関係のない遺構である。特に、ＳＫ０１は内部に被熱した燻瓦が多く含まれることから火災後の廃棄土坑とみられる。温泉津では、延享４（1747）年に大火が発生し、多くの屋敷が被害を受けている。ＳＫ０１は大火で発生した瓦礫を処分した土坑の可能性がある。そのことを裏付ける資料として、ＳＷ０１直上で出土した肥前磁器（Fig.14-55）は 18 世紀中頃の製品と推定されることから、大火の年代と整合している。火災の被災痕跡や事後整理の痕跡が建物内部で検出されたことから、現在の八番蔵は大火後に新築されたか、大火以前から建っていたが被災し、周辺を整理したのちに修理された、または大火前と同規模で再建されたなどの可能性が考えられる。いずれにしても、大火以前からの建物が被災せずに現在まで引き継がれているとは考えにくい。

また、廃棄土坑や炭化物層から燻瓦が出土していることから、大火で被災した建物は燻瓦葺きであったと推定される。

第２節　次年度の課題

大谷地区における次年度の課題は、以下の３つである。

①銀山川北側における、遺構の配置と変遷の把握。

ＳＤ０１は広範囲に及ぶ遺構で、当地の土地利用と景観に大きく影響している。そのため、流れる方向を確認し、地割や平坦地に所在する遺構との関連を明らかとする必要がある。

②ＳＢ０１の全体規模の把握と、ＳＢ０１内における遺構配置・機能の確認。

ＳＢ０１は長大な建物で、全体規模の把握ができていない。加えて床面を頻繁に貼り替えていた痕跡などが確認されており、付近に製錬に関する遺構の所在が想定されているものの、把握までは至っていない。炭化物の集積が確認されたＳＸ 70 の下には炉跡が残っている可能性があるため、来年度の調査で明らかとしたい。

③銀山川南における岩盤加工遺構の確認と記録。

銀山川の南側においては、銀山川北側と同じく広い範囲に岩盤加工が展開していることや、平坦地を宅地として利用していることが、分布調査と環境整備・トレンチ調査によって確認できた。今年度は調査期間の都合によって十分に記録作業ができなかったため、次年度の課題としたい。また、本格的な発掘調査には至らずとも、岩盤を顕在化し、広範囲を測量して全容の把握に努めたい。

第２章でも述べたように、大谷は石見銀山の中でも見学者の多い地域であり、発掘調査成果を整備・公開する上での適地である。令和２・３年度の調査によって、岩盤加工の展開や平坦地の利用状況に関する遺構が検出され、当地における開発・土地利用・生産活動を明らかとするための成果が蓄積されてきている。特に、ＳＢ０１は江戸時代後半から近代ころまで操業していた吹屋の可能性があることから、江戸時代後半における金属生産の実態解明が期待される。

来年度は大谷地区発掘調査の最終年である。課題は多いが、大谷が見学者にとって銀山を理解する上での適地となるよう、整備・公開を見据えて調査を実施したい。

引用・参考文献

島根県文化財愛護協会 1986『石見銀山遺跡総合整備計画策定関連　石見銀山関連資料関連遺跡分布調査報告』

島根県教育委員会・島根県文化財愛護協会 1987『石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書』

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山遺跡総合調査報告書』第1冊【遺跡の概要】

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山遺跡総合調査報告書』第2冊【発掘調査・科学調査編】

島根県大田市 2006『史跡石見銀山遺跡保存管理計画書』

島根県教育委員会・大田市教育委員会 1999『石見銀山遺跡発掘調査報告』Ⅰ

中田健一他 2005『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅱ　島根県教育委員会・大田市教育委員会

中田健一・新川隆 2013『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅲ　島根県教育委員会・大田市教育委員会

山手貴生・新川隆・尾村勝 2019『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅳ　大田市教育委員会

島根県教育委員会・大田市教育委員会 2000 ～ 2004『石見銀山遺跡発掘調査概要』10 ～ 14

大田市教育委員会 2006 ～ 2021『石見銀山遺跡発掘調査概要』15 ～ 28

大田市教育委員会 2018『内藤家住宅建築調査報告書』

島根県教育委員会 2016 ～ 2019『石見銀山 近代史料集』第一集～第四集

新川隆 2019「陶磁器からみた鉱山町の変遷」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書』4　島根県教育委員会・大田市教育委員会

江戸遺跡研究会 2001『図説江戸考古学研究事典』

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

大橋康二 1984「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館

大橋康二 1994『古伊万里の文様　初期肥前磁器を中心に』理工学社

小野正敏 1982「15 ～ 16 世紀の染付碗・皿の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2

神戸市教育委員会 2001『兵庫県指定有形民俗文化財　沢の鶴大石蔵　発掘調査報告書』

神戸市教育委員会 2004『御影郷波かえし蔵－御影古酒造群第2次発掘調査の記録－』

神戸市教育委員会 2007『御影古酒造群第4次発掘調査報告書』

神戸市教育委員会 2007『西郷古酒造群／大石東遺跡発掘調査報告書－第4次調査－』

西尾克己 2013「石見銀山遺跡出土の在地系陶器・石見焼について（1）」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』3　島根県教育委員会・大田市教育委員会

西尾克己 2014「石見銀山遺跡出土の在地系陶器・石見焼について（2）」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』4　島根県教育委員会・大田市教育委員会

西田宏子・大橋康二監修 1988『古伊万里』別冊太陽　日本のこころ 63　平凡社

平田正典 1979『石見粗陶器史考 －原点の模索と丸物師の生活史－』黒潮社

守岡正司・新川　隆 2011「陶磁器から見た石見銀山遺跡」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書』1　島根県教育委員会・大田市教育委員会

森田勉 1982「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2

図　　版

大谷地区　4区完掘状況（北より）

同　4区完掘状況　（北東より）

ＰＬ．０２

大谷地区　４区第１面検出状況（北より）

同　４区第１面検出状況（北東より）

大谷地区　4- II区第1面検出状況（北より）

同　4- III区第1面検出状況（北より）

PL. 04

大谷地区　4-Ⅱ区第1面遺構検出状況（北より）

同　4-Ⅱ区第1面遺構検出状況（西より）

大谷地区　4-Ⅱ区ＳＤ01検出状況（西より）

同　4-Ⅱ区ＳＤ01完掘状況（西より）

同　4-Ⅰ・Ⅱ区黄色土検出状況（北より）

同　4-Ⅱ区ＳＸ70検出状況（北より）

同　4-Ⅱ区ＳＸ70検出状況（南より）

同　4-Ⅱ区ＳＸ70検出状況（西より）

PL. 06

大谷地区　4- II区第3面遺構検出状況（北より）

同　4- II区第3面遺構検出状況（西より）

大谷地区　4-Ⅰ・Ⅲ区第3面遺構検出状況（北より）

同　4-Ⅰ・Ⅲ区第3面遺構検出状況（南東より）

PL. 08

大谷地区　4-Ⅱ区ＳＤ01北面石積検出状況（南より）

同　4-Ⅰ区ＳＤ01完掘状況（北より）

大谷地区　4-III区SD01完掘状況（北より）

同　4-III区SD01石積検出状況（西より）

同　4-III区SD01石積検出状況（東より）

同　4-III区SD01石積検出状況（北より）

同　4-III区SD01石積検出状況（北より）

PL. 10

大谷地区　4-Ⅱ区SX70炭層検出状況（北より）

同　4-Ⅱ区SX70炭層検出状況（南より）

同　4-Ⅱ区SW07・08炭層検出状況（東より）

同　4-Ⅱ区SW07・08炭層検出状況（南より）

同　4-Ⅱ区SD11検出状況（西より）

同　4-Ⅰ区南側検出状況（南より）

同　4-Ⅲ区SW09検出状況（南より）

大谷地区　4-Ⅱ区西壁土層断面（東より）

同　4-Ⅱ区西壁北側土層断面（東より）

同　4-Ⅱ区西壁中央土層断面（東より）

同　4-Ⅱ区西壁南側土層断面（東より）

同　調査指導風景（北より）

PL．12

大谷地区　６T全景（南東より）

同　６T全景（北より）

同　６T南側検出状況（北より）

同　６T南側検出状況（西より）

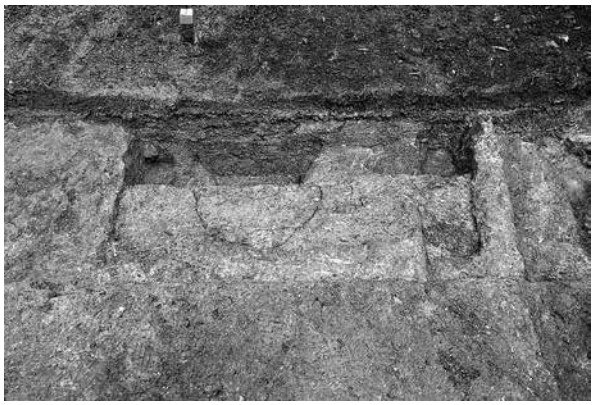
同　６T北側検出状況（南より）

大谷地区　6TSB03検出状況（南より）

同　6TSB03検出状況（南より）

同　6TSD12検出状況（東より）

同　6TSD12検出状況（北より）



同　6TSK10・11検出状況（西より）

同　6TSK10・11検出状況（南より）

同　6TSK11土層断面（西より）

同　6TSD13・SK12検出状況（南より）

PL. 14

内藤家地点　調査前状況（北西より）

同　完掘状況（北西より）

内藤家地点　2T完掘状況（南より）

同　1T・2T調査前状況（南より）

同　1T完掘状況（北より）

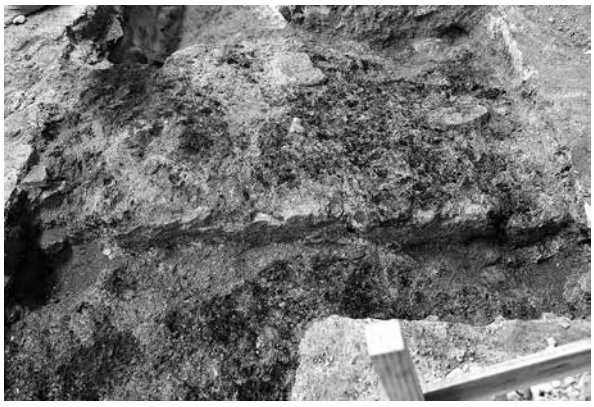
PL. 16

内藤家地点　SX01調査前状況（北より）

同　SX01北側掘下げ状況（北より）

同　SX01北側完掘状況（北より）

内藤家地点　2T炭化物層検出状況（西より）



同　2TSW01検出状況（南より）

同　2TSW01検出状況（西より）

同　2TSW01石材検出状況（西より）

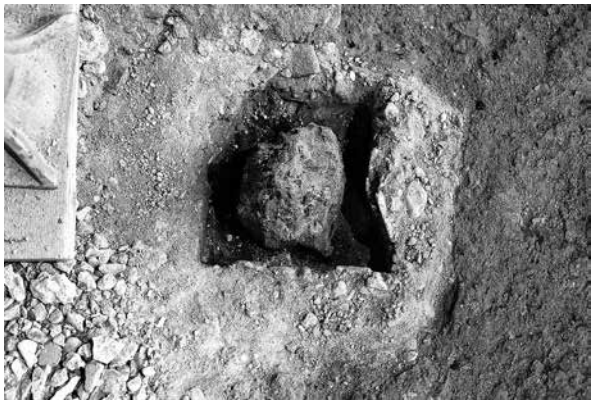
同　2T炭化物層土層断面（東より）

PL．18

内藤家地点　3TSW02検出状況（西より）

同　3TSW02検出状況（北より）

同　1TSP01完掘状況（西より）



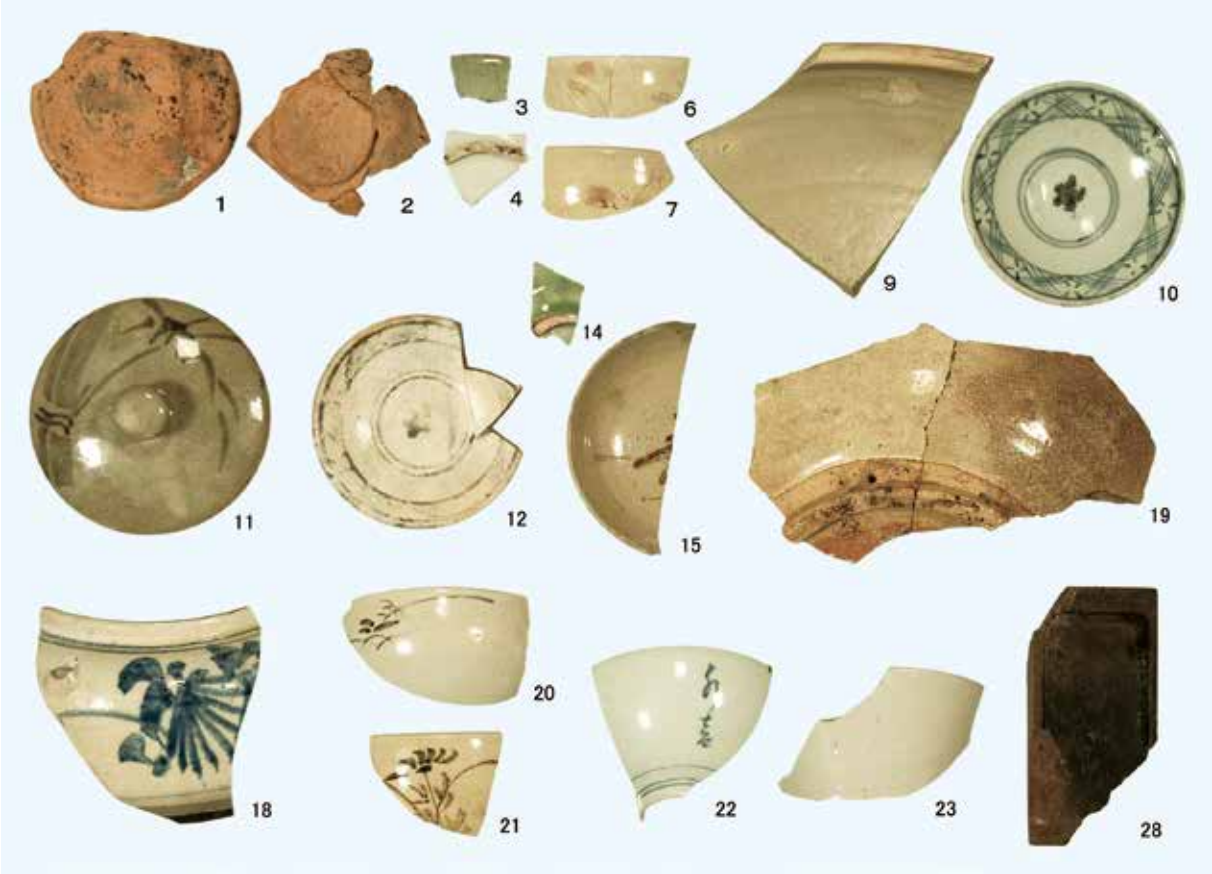
同　1TSP01完掘状況（北より）

同　1TSP02完掘状況（東より）

同　1TSP02完掘状況（北より）

同　SX01内垂壺完掘状況（北より）

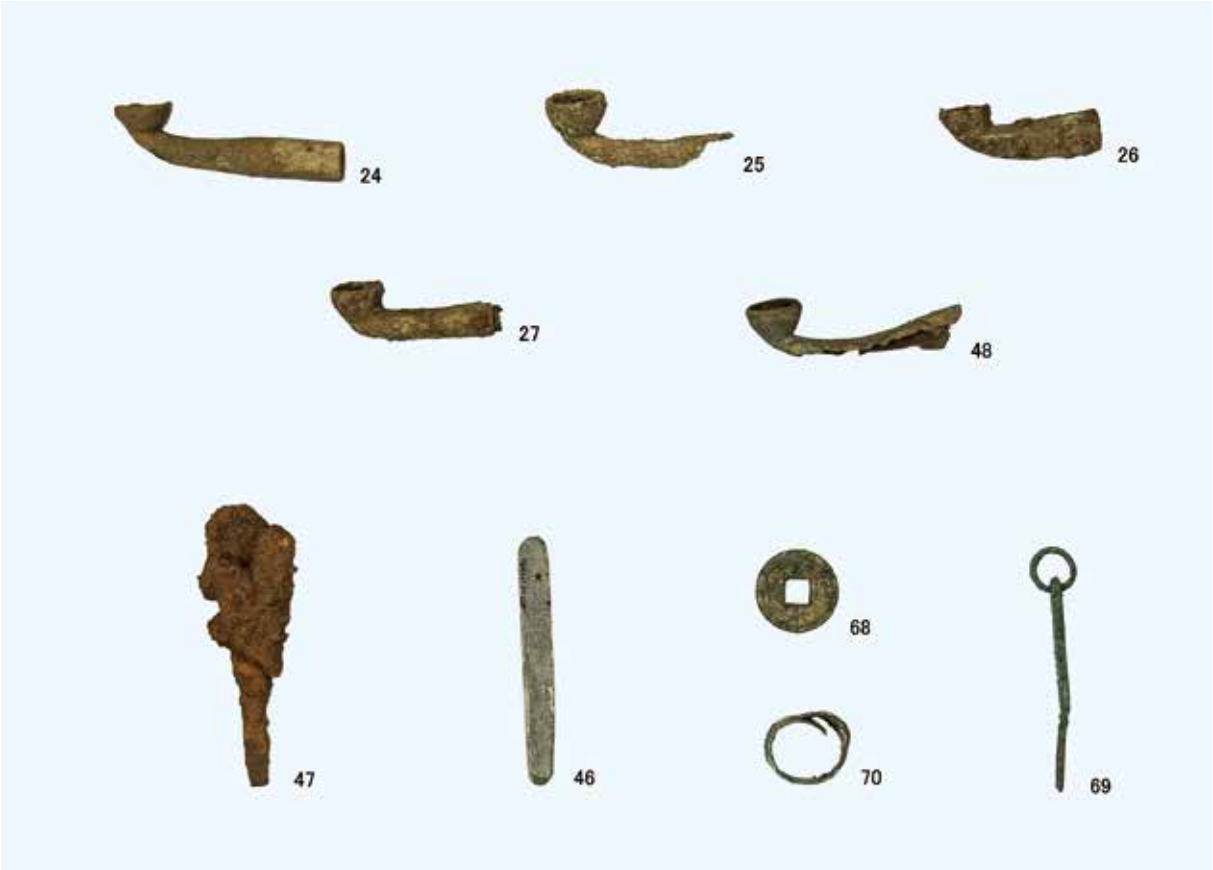
同　SX01内水溜完掘状況（北より）



大谷地区第４地点出土遺物

PL. 20

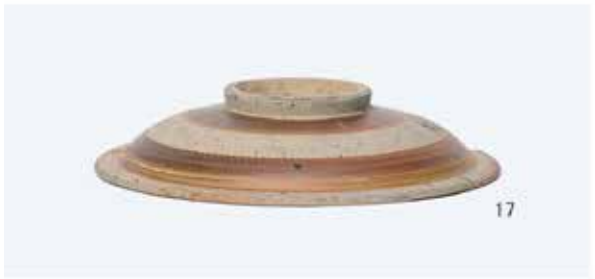
大谷地区６T出土遺物



大谷地区・内藤家地点出土金属製品

内藤家地点出土遺物

PL. 22



大谷地区・内藤家地点出土遺物

報告書抄録

ふりがな	**いわみぎんざん**					
書　　名	石見銀山　Iwami-Ginzan Silver Mine Site					
ふりがな	いわみぎんざんいせきはっくつちょうさがいよう					
副 書 名	石見銀山遺跡発掘調査概要 29					
シリーズ名・巻次	大谷地区・内藤家地点					
編 著 者 名	山手貴生・新川　隆・尾村　勝					
編 集 機 関	島根県大田市教育委員会					
所 在 地	〒 694-0064　島根県大田市大田町大田ロ 1,111					
発 行 年 月 日	2022 年 3 月 31 日					

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査年月日
		市町村	遺跡番号			
石見銀山（いわみぎんざん）	島根県大田市大森町（しまねけんおおだしおおもりちょう）	32205	A232 ～ 319	35° 5’ 30”	132° 26’ 30”	2021 年 8 月 ～ 2022 年 1 月
調 査 面 積	１５３㎡					
調 査 原 因	国庫補助事業による学術調査					

所収遺跡名	各種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
石見銀山	鉱山遺跡	戦国時代 江戸時代 明治時代	土　　坑 石　　垣 石　　列 溝　　跡 岩盤加工	陶磁器 金属製品 木製品 石製品	国指定史跡 銀生産遺跡 （1969 年 4 月 14 日） （2002 年 3 月 19 日、 2005 年 3 月　2 日、 2005 年 3 月 14 日、 2008 年 3 月 28 日 追加指定）

石　見　銀　山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要 29

●

― 大谷地区・内藤家地点―

２０２２年3月

島根県大田市教育委員会

島根県大田市大田町大田ロ 1,111 番地

印刷・製本　柏村印刷株式会社